

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

「心に残る授業」のために人間力を高め続ける  
東京都・私立中央大学高校◎仲森友英

## 4 特集

# 私たちはなぜ学ぶのか?

## 「高校生未来プロジェクト」から考える生徒の学びの意欲

## 6 課題整理 低くとどまる学びの意欲

震災後に高まる社会貢献意識

## 8 高校生の姿から考える 何が学びの意欲を高めるのか

——「社会貢献意識」と「学び」をつなぐ試み

●「高校生未来プロジェクト」から見えること

「学び、社会、自分」の語り合いで変容する高校生の姿

●とじ込み ポスト 3.11 高校生未来プロジェクト

「『学び』がボクらを、社会を変える」ワークショップレポート

●「高校生未来プロジェクト」参加高校生に聞く

私たちにとっての勉強の意味、学校という場

## 16 座談会

学びの意味を模索する生徒に私たちはどう向き合うのか

オックスフォード大教授◎菊谷剛彦

公立高校教師◎竹歳真一 / 公立高校教師◎前田幸男

## 20 新課程 教科指導最前線

## 新企画

数学 指導の工夫によって生きる力を育みやすい2つの新設分野

福井県立武生高校◎入試での出題予測を基に、対応力を高め、言語活動や課題学習を導入

三重県立白山高校◎新設2分野の内容を活用し、生徒の基礎学力を育む

## 26 指導変革の軌跡

## 26 石川県立金沢錦丘高校

思考力育成◎全校体制で言語活動を取り入れ、論理的・批判的思考力を育成

## 30 神奈川県・私立三浦学苑高校

学校改革◎教師の意識改革を図り、生徒・進路・教科指導の総合的な改革を推進

## 34 生きたデータの徹底研究

3年生 夏休み前の意識付け

## 38 未来をつくる大学の研究室

複数の国の法制度を比較し、発展途上国への支援策を提案

名古屋大大学院 法学研究科 松浦好治研究室

## 48 Reader's VIEW

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 「心に残る授業」のために 人間力を高め続ける

東京都・私立中央大学高校 仲森友英

学びにゴールはない、と人は言う。そうであるならば、学びの伴走者である教師にもまた、ゴールはないはずだ。哲学を語り、芸術を愛し、教養を深め、人間力を高めたいと渴望する仲森先生が、人間的魅力あふれる恩師との出会いを振り返る。

## 生徒を知的に刺激した



生徒の心に迫る授業がいかにも難しいか、教師として経験を積

んだ今だからこそよく分かります。この先、体力が衰える分、それを補う人間的な深み、教養がますます必要になってくると思うのですが、自分はあまり変わっていない気がします。新任の頃は、40代といえどもっと大人に思えたのですが……。

私が広島県立呉三津田高校の生徒だった頃の心に迫る授業とあって、真っ先に思い出されるのが、水野善親先生の現代社会、倫理の授業です。水野先生はいつも三つぞろいのスーツ姿で、

女子生徒がノートに先生のネクタイの柄を毎日書き留めるほどおしゃれでした。先生の口癖は「キザに生きたい」。しかし、「キザ」が意味するものは決して見た目ではありませんでした。

水野先生は、授業でよく生徒を刺激する発言をなさっていました。政治や個人の生き方について、「諸君はこう考えているかもしれないが、正反対の考えもある」とあえて異論を提示することも多く、「そんな考えをする人がいるなんて許せない」と怒りをあらわにする生徒もいました。一般論ばかりで授業を進めるのではなく、時にはわざと悪役を買って、生徒を知的に刺激するその姿は、今思えばまさに「キザ」そのものでした。

また、その時は意味が分からなくても、なぜか心に残る話もたくさん先生から伺いました。日本画をたしなんでいらつしやる先生が、「髪の毛の量感、1本1本描き重ねることです生まれる」と話されたことがありますが、随分後になって「きつと人の厚みは一朝一夕には出ないことを伝えたかったのだ」としみじみと気が付いたものです。

多くは授業中の雑談での話ですが、それらが先生の経験に裏付けられたもので、さらに授業の本質から外れていなかったからこそ、30年近く経つ今なお忘れず、一層心に響くのです。

教育実習で母校に戻った時には、鮮烈な出来事がありました。生徒の前で臆せず日本史の授業

が出来た私を、多くの先生が「実習生にしては上出来」と褒めてくださる中、水野先生はひと言、「さっきの授業は、きみが本当にやりたい授業なのか？」とおっしゃいました。まさにはっとする思いがしました。私の授業は、教科書を読めば分かることを軽妙に解説しただけで、生徒に何を伝え、何を考えてほしかったのか、授業の軸がなかったのです。「水野先生にもきつと褒めてもらえるはず」と、天狗になっていた自分が恥ずかしくて仕方ありませんでした。

教壇に立つようになってからも、私は折に触れて水野先生から教えをいただいています。新

## 心に残る授業を目指して

全ての生徒は将来、社会に大きな貢献をする可能性を持っています。その可能性に敬意を表して、私は若い頃から、襟を正して教壇に立つことを旨としてきました。

しかし、授業では生徒の視野を広げるため、生徒を挑発するような話もしました。現代社会では、授業内容への批判をノートに書くことを義務付けましたが、「先生の発言は納得できない」と書かれたことが何度もあります。しかし、知的衝突を恐れ、要領よく授業を進めるだけでは、生徒の中にその教師との出会いは価値あるものとして残りません。教育実習での授業後の仲森先生には、そうしたことを伝えたかったのです。



は将来、社会に大きな貢献をする可能性

## 先輩教師の言葉

生徒を刺激する  
豊かな教養が  
教師には必要

広島県・私立安田女子中学・高校 校長  
水野善親

左 みずの・よしちか 広島県立大柿高  
校、呉三津田高校、呉宮原高校などを  
経て、竹原高校、呉三津田高校で校長  
を務める。2007年度より現職。

撮影◎安田女子中学・高校にて

右 なかもり・ともひで 地理歴史科。  
初任以来、中央大学高校に勤務。2学  
年主任。



任の年には、水野先生が教頭を  
務められていた学校を訪ねまし  
た。卒業式の前日、3年生の全  
クラスを回って黙々と花を生け  
る先生の姿を見て、私は「生徒  
のために」という言葉の意味を  
深く考えることが出来ました。  
また、初めて学年主任になった  
時は2か月以上にわたってメー  
ルで相談をさせていただきまし  
た。「芸術に触れ、哲学を学び、

自分の感性を磨くことがこれか  
らますます必要です」という一  
文を目にした時は、私の仕事は  
人間を育てることなのだと思  
て教えられた気がしました。  
私にとつての水野先生がそう  
だったように、私は、泥臭さを  
意図的に生徒にぶつける情熱と  
知恵を持った教師、生徒が自分  
の人生を振り返った時に思い出  
される教師になりたいと思いま

す。功利的な考えに傾きがちな  
社会風潮の中、高校3年間の成  
果だけにとらわれることなく、  
10年後、20年後に表れるかもし  
れない気付きを信じて種をま  
き、辛抱強く見守るためには、  
私自身にこの社会をどう生きる  
かという信念、哲学が必要です。  
そう思うと、私たち教師には、  
「これで一人前」というゴール  
はないような気がします。私は、

東京でも尊敬する先生に出会い  
ましたが、その方も「人として  
心を磨くこと」を真摯に、誠実  
に続けていらっしやいます。  
それにしても、恩師の方々は  
若き頃、やはり今の私と同じよ  
うに悩みや不安を抱えていたの  
でしょうか。水野先生はじめ先  
輩方の歴史と向き合いながら、  
これからも授業力と人間力を高  
めていきたいと思っています。

教師の言葉が生徒の心に残  
るのは、教師が、他の人とは  
違った見方を、自身の体験を  
踏まえて語った時です。その  
ため、教師には哲学を語り、  
社会を見通し、芸術を愛する  
教養が必要です。絵が描けな  
くは駄目だということでは  
なく、芸術への興味を生徒の  
中に喚起できる教師でなけれ  
ばいけないということです。  
グローバル化が進む中、周  
囲に翻弄ほんろうされることなく、プ  
ライドを持った人間として存  
在するためには、文化が必要  
だと言われます。では、私た  
ち教師は、生徒の内面に文化  
を根付かせるだけの教養を備  
えているのでしょうか。社会  
が大きく変わる今だからこ  
そ、教師は「これで十分」と  
思うことなく、学び続けなけ  
ればならないと思います。  
仲森先生ともよく話すので  
すが、教育の本質は生徒のや  
る気に火をつけることです。  
それが出来れば、生徒は自ら  
学びます。そのためには、生  
徒たちが涙を流し、大笑いし、  
時に怒りの表情を浮かべるよ  
うな授業をし、生徒と共にど  
う生きるかを考えることが必  
要です。仲森先生も私も、ま  
だまだ教師としての学びは続  
いていきます。

# 私たちは なぜ学ぶのか？

「高校生未来プロジェクト」から考える生徒の学びの意欲

主体的に学び続ける姿勢を持ち、これからの社会を

たくましく生き抜いていく生徒を育成するためには、何が必要か。

今号では、「学びの意欲研究」としてベネッセ教育研究開発センターが実施した、

「ポスト3・11 高校生未来プロジェクト」の実践を基に、

高校生が主体的に学びに向かうための手立てを考える。

## 高校生の「学び」への思い

「正直、今やっている勉強は社会で役立てるためのものではなく、大学受験のためだと思ってしまう。今やっていることが間接的に『将来の自分』を創る上で役立ってくれたらよいなと思うが、意味はあまり分らない」

（長崎県／公立／女子／2年）

「高校の勉強は『意味がある、ない』の問題ではないと思う。意味を見いだせなくても、大学進学のためには必要不可欠とされるのが現状だ。『何の役に立つのか』と思うことはあるが、時間の無駄なので深く考えないことにしている」

（和歌山県／私立／男子／1年）

「将来、自分がやりたいことをするために必要なだと自分に言い聞かせているが、全く実感できない。理由は、学んだことの使い方が分からないことと、使う機会が少ないことだと思う。勉強にどんな意味があるのか、私には分からない」

（京都府／公立／女子／1年）

\*「高校生未来プロジェクト」参加高校生の、プロジェクト参加前の声より。学年は参加当時のもの。

本号のテーマ

# 高校生が主体的に学びに向かうためには？

## 「高校生未来プロジェクト」の仮説と仮説検証の枠組み

東日本大震災後、高校生の社会貢献意識の高まりが見られた。高校・大学での「学び」が、社会への貢献に役立つことを実感できれば、高校生の学ぶ意欲は高まるのではないかと？

高校生が社会と「学び」のつながりを実感できる場として、ワークショップを実施すると共に、参加者の学びに対する意欲の変容の追跡調査をベネッセ教育研究開発センターで企画。

## ポスト 3.11 高校生未来プロジェクト 「『学び』がボクらを、社会を変える」

### 「高校生未来プロジェクト」から見えたこと ▶ 高校生の姿から考える P.8~15、とじ込み



「社会の問題解決のためには、複数の分野の知識を基に新しい知識をつくる必要があると分かった。入試科目以外の教科を勉強しなかったことを後悔した」

岩手県・高校3年生(参加当時) 小池悠菜

「熱意のある参加者と素直に語り合ううちに、変わりたい、勉強したいと思った。以前の自分と同じようなクラスメートに、今度は自分が何かをしたい」

栃木県・高校1年生(参加当時) 山野上一輝



「皆が自分の目を見て、真剣に話を聴いてくれたことがとてもうれしかった。だから私も、他の人の話、授業での先生の話ちゃんと聴きたい」

京都府・高校1年生(参加当時) 八木杏奈

### 学校での指導を考える

▶ 座談会 P.16~19



「『主体的に学ぶ生徒を育てる』とは、生徒の思いのままにさせることではない。主体的な学びを成立させる場面を設定することが教師の仕事」

オックスフォード大教授 荻谷剛彦

「教師が本音で社会に対する考えを語る。そして、日常のかかわりの中で生徒の自己肯定感を高め、他者、社会へと意識の広がりをつくる」

公立高校教師 竹歳真一



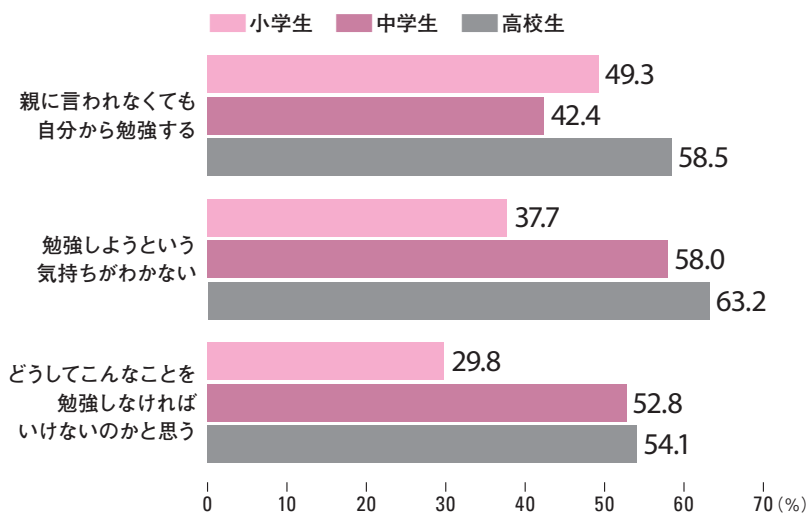
「自分をさらけ出し語り合うこと、相手の熱意に触れることで大きく変容する生徒。教師が、彼らの『変わりたい』という意欲を引き出すことがもっと必要」

公立高校教師 前田幸男

図1は、小学生から高校生までに、勉強の取り組みについて尋ねた結果だ。「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのか」「勉強しようという気持ちがわかない」と回答する比率は高校生が最も高く、「親に言われなくても自分から勉強する」は6割以下にとどまるなど、勉強の意義が見えず、意欲が高まらない高校生の実態がうかがえる。

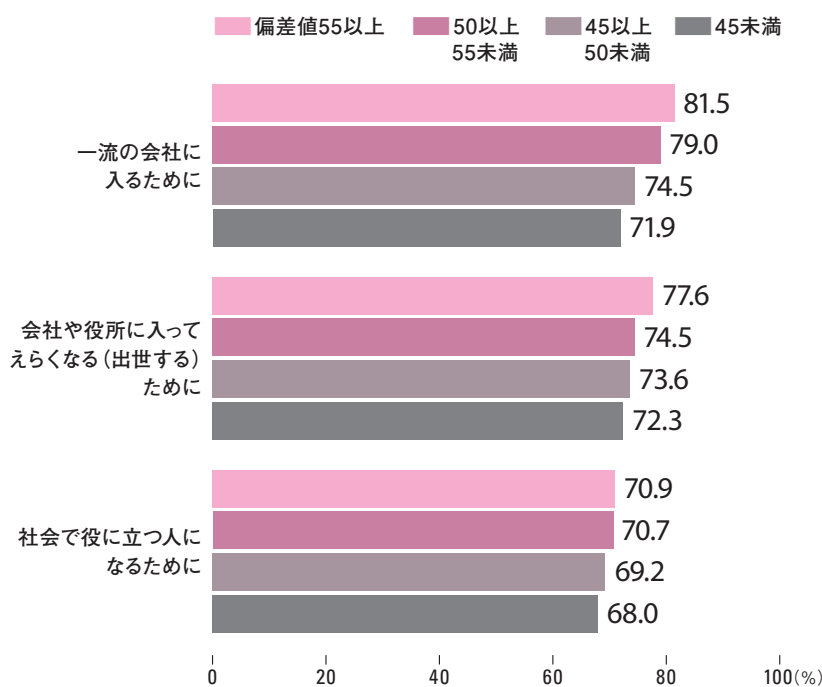
勉強の効用について聞いた図2を見ると、高い偏差値帯の学校に通う生徒ほど、「社会で役に立つ人になるため」というよりも、「一流の会社に入るため」「会社や役所に入っ  
てえらくなる（出世する）ため」と勉強を捉えている。勉強が「一流の会社に入る」「えらくなる」ためのものであるならば、これらの価値や、

図1 約5割の生徒が勉強の意義を感じられない



注1) 「とてもそう」+「まあそう」の%  
注2) 対象は、小学4～6年生 3,561人、中学1～3年生 3,917人、高校1～2年生 6,319人  
出典/ Benesse 教育研究開発センター 「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

図2 勉強は「一流の会社に入るため」



注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計  
注2) 対象は、普通科高校2年生 4,464人。「進研模試」データに基づく学校の偏差値帯別の内訳は、偏差値55以上 1,593人、50以上 55未満 905人、45以上 50未満 416人、45未満 1,550人  
出典/ Benesse 教育研究開発センター 「第4回 学習基本調査・国内調査 高校生版」(2006)

低くとどまる学びの意欲  
震災後に高まる社会貢献意識

学ぶ意欲が低下していると言われている現代の高校生。東日本大震災をきっかけに彼らの中に生まれた変化は、主体的な学びへと彼らを導くのだろうか？

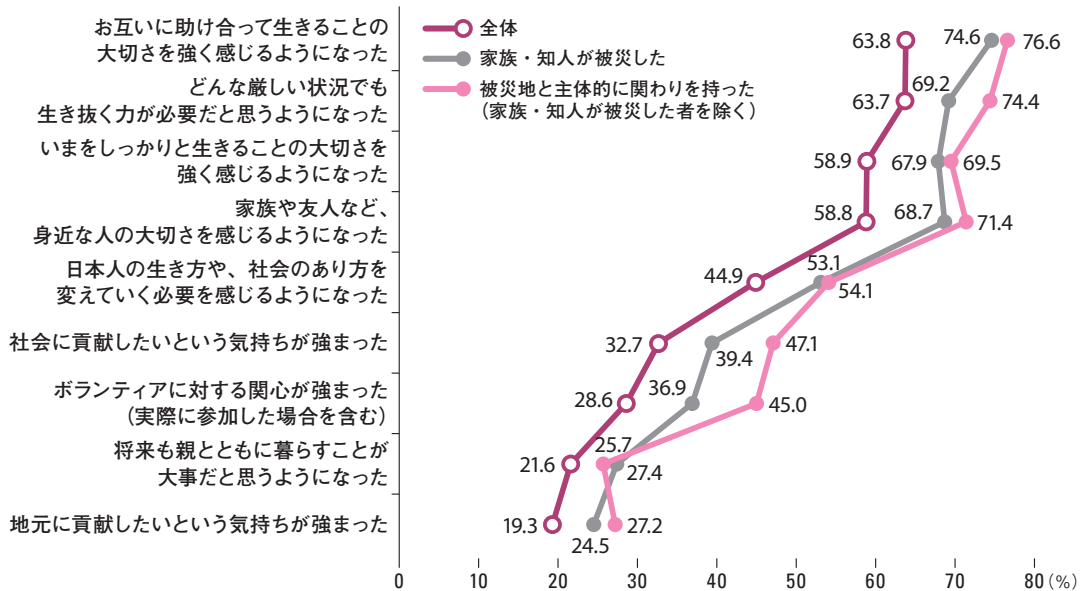
その道程の確実性が見えにくくなると共に、彼らはより、勉強の価値を見いだせず、結果、勉強への意欲が低くなることも考えられる。

図1、2は数年前の状況だが、2011年3月に発生した東日本大震災は、高校生の価値観に変化をもたらしているようだ。図3からは、身近な人の存在や相互の助け合い、今を生き抜くことの大切さを実感しながら、今後の日本の社会のあり方を考え、社会への貢献の意識が高まっている高校生の姿が見えてくる。また、図4からは「大学で学ぶ目的」や「社会や人の問題解決に直接役立つ学問分野」への関心の高まりも見てとれる。

このような高校生の意識の変化は、果たして日々の勉強に対する意欲、主体的に学ぶ姿勢につながるのだろうか。次ページからは、このような課題意識からベネッセ教育研究開発センターが主催した「高校生未来プロジェクト」の実践を基に、高校生の学びの意欲を高める方策を考えていきたい。

図3 震災後に強まる社会に貢献したい気持ち

Q. 2011年3月11日に発生した東日本大震災から約半年が経ちますが、あなたは、この度の震災の影響による変化として、次のようなことがどれくらいあてはまりますか？

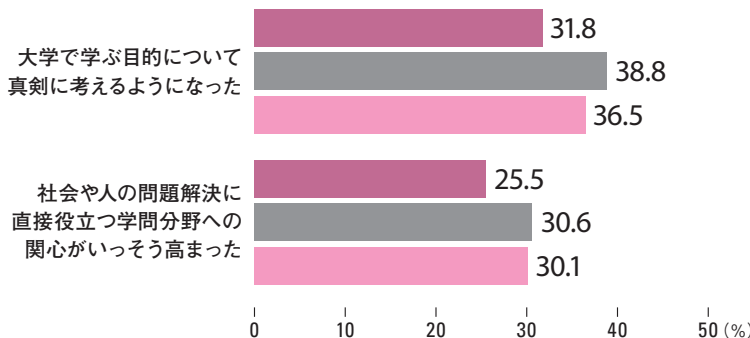


注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%  
 注2) 「家族・知人が被災した」…家族や自宅、親戚、友人・知人が被災した。「被災地と主体的に関わりを持った」…被災地を実際に訪れたり、ボランティア・募金・物資を送るなどの被災地支援を行った  
 注3) 「被災地と主体的に関わりを持った」ことと価値観の変化の関係を明らかにするために、「被災地と主体的に関わりを持った」層から「家族・知人が被災した」層を除いて集計した  
 注4) 対象は、高校1～3年生 4,564人  
 出典／Benesse 教育研究開発センター「高校生と保護者の学習・進路に関する意識調査」(2011)

図4 大学で学ぶ目的を真剣に考えるように

Q. 2011年3月11日に発生した東日本大震災から約半年が経ちますが、あなたは、この度の震災の影響による変化として、次のようなことがどれくらいあてはまりますか？

■ 全体 ■ 家族・知人が被災した ■ 被災地と主体的に関わりを持った (家族・知人が被災した者を除く)



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%  
 注2) 「家族・知人が被災した」…家族や自宅、親戚、友人・知人が被災した。「被災地と主体的に関わりを持った」…被災地を実際に訪れたり、ボランティア・募金・物資を送るなどの被災地支援を行った  
 注3) 「被災地と主体的に関わりを持った」ことと大学進学意識の変化の関係を明らかにするために、「被災地と主体的に関わりを持った」層から「家族・知人が被災した」層を除いて集計した  
 注4) 対象は、高校1～3年生 4,564人  
 注5) 大学進学希望者のみ分析  
 出典／Benesse 教育研究開発センター「高校生と保護者の学習・進路に関する意識調査」(2011)

## 高校生の 姿から考える

# 何が学びの意欲を高めるのか

## 「社会貢献意識」と「学び」をつなぐ試み

「高校生未来プロジェクト」では、高校生の生の声や姿を丁寧を追ってきた。プロジェクトの直後と、その後の彼らの様子から、高校生の学びの意欲向上の手がかりを探る。

## 「高校生未来プロジェクト」から見えること

# 「学び、社会、自分」の語り合いで変容する高校生の姿

社会に対してかわわっていききたいという高校生の思いは、学びという具体的な行動につながるのだろうか？  
学びの意欲を研究する「高校生未来プロジェクト」の概要を紹介する。

## 学びの意欲を高める 実践的な研究をスタート

「高校生未来プロジェクト」（正式名称「ポスト3・11 高校生未来プロジェクト」）は、2012年3月の第1回ワークショップ開催によってスタートした。2011年3月の東日本大震災を経て、全国の高校生が「これからの社会を自分たちでどう変えていくのか」「そのために何をすべきか」を2日間にわたって議

論した。社会のために何かをしたいと熱望する高校生の姿は、ベネッセ教育研究開発センターの調査からも明らかになっていた「高校生の社会貢献意識の高まり」（P.7参照）を裏付けるものでもあった。

一方、第1回ワークショップを通じて、社会貢献意識が日々の学びという具体的な行動につながっていない高校生の現実も見えてきた。そこで、ベネッセ教育研究開発センターでは、学びの意欲研究の1つとし

## ワークショップの大きな流れ

- |         |             |   |
|---------|-------------|---|
| 1<br>日目 | 13:00       | ワークショップ開始   |
|         | 13:20       | 自己紹介、参加理由、期待などを共有                                       |
|         | 13:35       | 大切にしている価値観、問題意識を共有                                      |
|         | 14:00       | 「高校での勉強」「大学での学問」「社会貢献」「未来・将来の自分」について気になっていることを書き出し、語り合う |
|         | 15:05       | 語りたいテーマを選んでディスカッション                                     |
|         | 16:30       | オックスフォード大・苅谷剛彦教授講義「学問と社会のつながり」                          |
|         | 18:00       | 大学生・社会人とのセッション「学問・勉強と今」                                 |
| 20:00   | 1日目終了/宿舎へ移動 |   |
| 2<br>日目 | 9:30        | 実現したい社会と、そのための貢献についてディスカッション                            |
|         | 10:45       | 大学の学問と、高校の勉強の意味・価値についてディスカッション                          |
|         | 13:00       | 学びの目的をシートに記入、共有   |
|         | 13:40       | 半年後の自分への手紙を書く   |
|         | 14:00       | ワークショップの感想、気付き、そして「自分にとっての学び」を一言ずつ発表                    |
|         | 15:00       | 全プログラム終了  |



ワークショップ当日の様子、苅谷先生の講義を、映像でご覧いただけます！

ベネッセ教育研究開発センター「ポスト3.11 高校生未来プロジェクト」ウェブサイトをご覧ください

<http://benesse.jp/berd/hirakemirai/report.html>

ベネッセ 高校生未来 で 検索 ▶ 「ワークショップ報告」をご覧ください

1 日目

2012年12月26日

高校・大学での学びが社会貢献につながることで実感できれば、学びの意欲が高まるのではないかとという仮説に基づき、2日間にわたって行われたワークショップの様子を紹介する。

# 『学び』がボクらを、社会を変える」ワークショップレポート

ポスト3.11 高校生未来プロジェクト

20:00

18:00

16:30

15:05

13:35

13:00

## 大学生・社会人との対話 「学問・勉強と今」



### 多様な出会いから 学びの意味を知る生徒

グループごとに大学生と社会人1人ずつをゲストに迎え、学びについてそれぞれの体験を聴き、感想や意見を述べ合った。夕食を取りながら1時間30分ほど対話を続けた後、全員が1日目の感想を述べ、宿舎へと移動した。

#### 高校生が語った 「1日目が終わっての気付き」

- 前を見るというのは、皆と向き合うことだ
- 自分に知識がないことが分かった。生きるために考える力を身に付けたい
- 人と話すことが楽しかった。話すために知識を身に付けたい

## 苅谷剛彦先生の講義 「学問と社会のつながり」



### 社会における 学びの意味を考える

苅谷先生の著書『学校って何だろう』（ちくま文庫）を事前に読んだ上で、実際に大学で行われる教育社会学の講義に臨んだ。「高校で学ぶ内容は、人類が積み重ねてきた知識のほんの一部ではない。その宝の山を目の前にして学ばないことはもったいないし、学んで無駄になるようなものは1つもなし」「これからの社会では、解決すべき問題がたくさんある。知識の伝承だけではなく、知識を創り出すことも大切」などの苅谷先生の言葉に聴き入った。

愛知県／公立／女子／2年（当時）  
参加前

高校で学ぶことのほとんどが、将来の生活では直接必要のないことばかり。それでも勉強をする理由はただ1つで「センター試験で必要だから」。しかし、センター試験は将来につながる。結局、勉強は将来のためにするもの。だから、センター試験で良い点を取ることが、今高校で学ぶ意味だと思っ

◎1日目終了時

こんなにも皆の価値観が違うとは思わなかった！ 皆の答えがしっかりしていて驚いた。ずっと頭を使っていたので、とつても疲れていろんな意味でモヤモヤしている。

◎2日目終了時

日本や世界の問題について、「自分とは関係ない」ではなく、積極的に問題に立ち向かっていきたいと思った。高校での学びは、夢をかなえるための学問が学べる大学へ行くための通過点であり、高校での時間は夢を見付けるための時間でもあると思う。

## 8つのテーマから 自分が語りたいテーマで対話



#### 8つのテーマ例

夢の職に就けなかった時、なんて自分は思うのか/今勉強していることと、大学とのつながり/偏差値が良い学校に行って何がしたいのか

### 高校生活の疑問を 吐露する生徒たち

前のセッションの最後に、全体で語り合いたいテーマとして各グループから計8つのテーマが出された。その中で自分が語りたいテーマを選び、15分ほど語り合った。その後、違うテーマに移動し、語り合いを重ね、グループごとに話し合った内容を全体発表した。

#### 高校生の対話の中での声

- 「夢が破れた時」というけれど、いつ、何をもって破れたというのか
- 説明されれば進路が選べるというわけでもない。分からないまま選んでいる人もいる
- どんな大人になりたいのかと問うけれども、大人になるために何が必要かを教えてほしい

## 自分が大切にしている価値観、 問題意識を語り合う



#### 高校生が書いた付箋より

- なぜ英語は文系にも理系にも必要なのか
- 高校の頃からやりたい学問を学んではいけないのか
- 動画を見て勉強する塾もあるのに、なぜわざわざ学校に行くのか
- 「大学入試のために勉強する」と言ってくれた方が気が楽
- 大学に行かない理由が見付からないので、大学に進学する

### 自分の大切なもの、 気になることを語る

「自由」「お金」「社会的評価」など28のキーワードが記された価値観マップから、大切だと思うものを丸囲みし、4、5人のグループで自分のベスト3とその理由を発表し、質問をしながら感想を語り合った。その後、「高校での勉強」「大学での学問」「社会貢献」「未来・将来の自分」で、思い付いたことや気になることを1項目につき5枚以上付箋に書き、模造紙に貼りながら語り合った。

## ワークショップ開始 多くの人と自己紹介



### 多様な仲間との 出会いを実感する

全国から集まった34人の高校生、2人のファシリテーター、そして苅谷剛彦先生が大きな輪になり、自己紹介からスタート。ワークショップ開始前に記入した自己紹介シート（自分を動物に例えると/参加した理由/2日間の期待について記入したもの）を持って会場内を歩き、5分間で出来るだけ多くの相手に話し掛け、自己紹介をしていった。

REPORT ワークショップの企画概要、参加高校生の  
変容をまとめた報告レポートを掲載しています！

ベネッセ教育研究開発センター「ポスト3.11 高校生未来プロジェクト」ウェブサイトをご覧ください  
<http://benesse.jp/berd/hirakemirai/report.html>  
ベネッセ 高校生未来 で 検索 ▶「ワークショップ報告」をご覧ください

ポスト3.11  
高校生未来プロジェクト

『「学び」がボクらを、  
社会を変える』  
ワークショップ概要

●参加者  
全国の高校1～3年生34人  
(男子13人 女子21人)  
\*学年内訳(1年生11人 2年生17人  
3年生6人) / 地域内訳(北海道・東  
北6人、東京除く関東・甲信越6人、  
東京6人、東海・北陸3人、近畿5人、  
中国・四国2人、九州・沖縄6人)

●期間  
2012年12月26日(水)～27日  
(木) 1泊2日

●会場  
東京大本郷キャンパス 福武ホー  
ル内 福武ラーニングスタジオ  
(東京都文京区)

●宿泊施設  
東京セントラルユースホステル  
(東京都新宿区)

●参加費  
無料  
\*宿泊費、開催中の食事代含む。現地  
までの交通費は規定に基づき一定額  
を補助

●募集方法  
『VIEW21』高校版2012年10月号  
にポスターを同封の上、ベネッセ  
教育研究開発センターウェブサイ  
ト内に特設申し込みページを設  
置し公募。100人を超える応募か  
ら、作文課題の内容により審査。

募集人数：約30人  
(学年は問わず、日本国内の高等  
学校、およびそれに準ずる学校に  
在籍する生徒を広く募集)  
受付期間：2012年10月7日～11  
月11日  
作文課題：あなたはこれからど  
んなことを、どのように学びたいと  
思いますか？ 将来の社会貢献  
とのつながりや、自分が大切にし  
ている価値観を踏まえて、今の考  
えを書いてください(800字程度)。

●企画協力  
荻谷剛彦先生(オックスフォード  
大教授 / 元東京大教授)

●運営協力、当日ファシリテート  
與良昌浩氏(株式会社スコラ・コ  
ンサルタント / ハタモク代表)  
生田早智江氏(One&Only 代表 /  
ハタモク副代表)

●主催  
ベネッセ教育研究開発センター  
「高校生未来プロジェクト」事務局

15:00 13:40 13:00 11:15 10:45 9:30

## 半年後の自分への 手紙をしたためる

### 今日の気付きが 未来の自分を変える

各自便せんに向き合い、半年後の自  
分への手紙を書いた。ワークショップ  
で学んだこと、これから行動してい  
きたいこと、頑張ったであろう半年後の  
自分へのメッセージなどを書いた。そ  
して最後に、全員が再び1つの輪にな  
り、今回のワークショップの感想や気  
付き、自分にとっての学びの目的を一  
言ずつ発表して、2日間のプログラム  
が終了した。「半年後への手紙」は、  
2013年6月に各自の手元に届く。

### ワークショップを終えて

- ・学びによって世界の課題を解決できるこ  
とが分かって、もっと勉強したくなった
- ・学びは新しい自分を見いだすためのもの  
だと分かった
- ・社会人はいろいろな知識や体験があるか  
ら豊かな話が出来るのだと思った
- ・対話の素晴らしさを知ったのは私たちの  
特権。その特権に対する義務は、対話の  
素晴らしさを学校に戻って伝えることだ

## 学びの目的を共有し 励まし合う

### 「マナモクシート」の項目

- 社会とどうつながっていき  
たい？(どう社会に貢献したい？  
人の役に立ってみたい?)
- 自分なりに考える大学での学  
問の意味・目的は？
- 自分なりに考える高校での勉強の意味・目的は？
- この2日間で気づいたこと、感じたこと
- 明日から考えてみよう、行動してみようと思っ  
たこと

## 明日からの具体的な 行動に落とし込む

学びの目的について考える「マナモ  
クシート」を各自記入し、内容をグルー  
プで共有した。そして各自の「明日か  
らの考え、行動」について、互いにア  
ドバイスや応援メッセージを付箋に書  
き、渡し合った。

### 「マナモクシート」の言葉より

- ・まず宿題をやる
- ・授業中に疑問を感じたら皆で話し合いたい
- ・英語の勉強を頑張って、自分の世界を広  
げたい
- ・高校生が政治について語り合うSNSを  
立ち上げる

## 高校での「勉強」の 意味・価値とは？



## 日々の勉強の意味を 大きな視野で語る

語り合いの最後のテーマは「高校で  
の『勉強』にどのような意味・価値・  
目的を見いだすか」。当初、「大学入試  
のため」と考えていた生徒もいたが、  
この場面では他者とのかわりや、長  
期的な価値を語るようになっていた。

### 高校生が考える「勉強の意味・目的」

- ・勉強することで自分の中に価値が出来る
- ・将来を通して学ぶ力を身に付けるため
- ・常識を身に付け、新しい世界観をつくる土  
台を築く
- ・抽象的な考え方を身に付け、大学の学び  
につなげていく

## 大学での「学問」の 意味・価値とは？



## 自分の中の学びの 欲求を追究する

3つめのテーマは、「大学での『学問』  
にどのような意味・価値・目的を見  
いだすか」。これまでの話し合いで得た気  
付きを踏まえて、学年別にグループを  
つくって話し合った。

### 高校生が考える「学問の意味・目的」

- ・いろいろなことを学ぶのが大学。とにか  
く楽しみたい
- ・社会に出た時に通用するように引き出し  
を増やす
- ・知識は社会を形づくるために必要なもの
- ・人よりもたくさんを知りたいとい  
う欲求があるから学ぶ

## 実現したい社会と、 そのために出来る貢献は？



## 高校生の自分と 社会との関係を考える

4つのテーマでのグループセッシ  
ョンを開始。まずは「20年後に実現され  
ていたい社会」「その実現に向けてどの  
ような貢献の仕方が考えられるか」と  
いうテーマで、グループの組み合わせ  
を変えながら話し合った。

### 高校生が語った「自分が出来る貢献」

- ・ボランティアなど身近なことからやりたい
- ・選挙に参加する。社会のことを知らない  
から投票に行かないのでは？
- ・中学生や高校生でも社会のことを知る場  
を増やしたい
- ・社会の問題に対して当事者意識を持つ

### 高校生の「学び」への思いの変化

■神奈川県 / 私立 / 男子 / 1年(当時)  
◎参加前  
自分の意見、考えを持った人たちの意見を  
聞いて、「なぜ勉強するのか？」の答えを探  
そうと思う。最近、自分にとってこの問いが「勉  
強から逃げるための道をつくっている」よ  
うな気がする。「勉強」は「生きる」と同じで、  
そもそも理由などないのではないかと。自分の  
考えだけでなく、他人の考えも聞いて答えを  
見付けたい。

◎1日目終了時  
自分はちっぽけな考えにとらわれていた。  
人の意見を聞いて視野を広げられた。荻谷先  
生の話で、自分たち世代が知識を生かして社  
会をより良くするという部分に納得した。

◎2日目終了時  
自分の知識を誰かと共有することでより深  
めるのが大学の学問なのだなと思った。今の自  
分はあまりにも知識や経験が少ないので、思  
い付きでものを話しているような気がした。  
だから、多くの本を読み、いろいろな活動に  
取り組みたい。

■ワークショップを見学した高校教師より  
◎これまで、今回のようなワークショップを  
授業に取り入れることに躊躇していた。しか  
し、生徒の変化の瞬間に立ち会い、自分の考  
えは間違っていたと実感した。価値観が大き  
く変わった。  
(北海道 / 公立)

◎生徒の熱い思いに触れることが出来た。だ  
が、多くの生徒は1か月も経つと、今回の経  
験を「良い思い出」として完結させる。今後  
のフォローや日常に飲み込まれないための工  
夫をどのように行うかが大切だと感じた。  
(三重県 / 公立)

■オックスフォード大 荻谷剛彦先生より  
◎「学ぶ」ということが自分の生き方や、社会  
とどうつながっているのか？ 生徒たちは、  
たくさん気付きを得たことと思います。大  
学受験を中心とした社会的な選抜システムに  
よって、生徒の日々の生活の中に語り合いが  
少なくなっています。社会システムを変えて  
いくことは難しく、先生個々人や企業の力で  
は全ての解決は出来ないかもしれませんが、  
このような取り組みを続けていけば、志を同  
じくする仲間が増え、学びに対して前向きに  
なれる高校生が増えてくるはずです。

て「社会と学びのつながりを実感することが、高校生を具体的な学びの行動に向かわせる」という仮説を立て、仮説検証の一環として、第2回ワークショップとその後学びの意欲の変容の追跡調査を企画した。

第2回ワークショップのテーマは、『学び』がボクらを、社会を変えろ」と決定。オックスフォード大学の荻谷剛彦教授の企画協力の下、全国から34人の高校生が集い、社会と学びとのつながりについて考える2日間のプログラムが実施された（詳細はとじ込み参照）。

ワークショップ終了直後のアンケートでは、生徒たちの学びの意欲が高まったという結果が得られた。更に3か月後の調査では、ばらつきはあるものの、学びの意欲は持続されている様子が見えてきた。

自分を見つめ、他者と語り合うワークショップが、なぜ学びの意欲を向上させたのか。ワークショップ当日のリポート、更に3人の参加高校生の振り返りから、その背景にあるものを探っていきたい。

## ワークショップ後の高校生の姿

### 数字で見る変化

#### 終了直後

2日間のワークショップを通して、学びに対する思いや、大学で学びたいことに変化はありましたか。

どちらとも言えない・  
分からない 0%

変化はなかった  
2.9%  
(1人)

変化があった  
97.1%  
(33人)

#### 3か月後

ワークショップ直後のあなたの学びに対する意欲を「100」とすると、3か月経った今のあなたの学びに対する意欲はいくつくらいになりますか。

度数	50	60	70	75	80	83	85	90	98	100	120	126	150	170
人数	1	1	3	1	6	1	1	7	1	2	1	1	1	1

平均は 90.6

\*ワークショップ直後のアンケートは、2012年12月27日のワークショップ直後に、34人が回答したもので、3か月後のアンケートは、2013年3月7日からwebアンケートで実施。3月25日までに回答があった28人分の集計値

### 参加者の声に見る変化

#### ●東京都／私立／女子／1年（当時）

##### 終了直後

高校の勉強は社会勉強であり、将来なりたい自分を見付けられるように視野を広げるためのものだった。ワークショップを通して、自分の想いを言葉にすることの難しさ、出た意見を自分の言葉でまとめ、その場になかった人や関心のない人に伝えることの難しさを痛感した。自分の考えを理解してもらえるように伝えることは、人生の中で大切だけど一番難しいと感じた。

##### 3か月後

テストや模試の前などに、皆で夢を語ったこと、20年後に実現したい社会について話し合ったことを思い出した。ワークショップを経て自分が変わったことは、目標を高く掲げるようになったこと。いろいろな人の意見を聞いて自分の理想が実現できるのはどの方面なのかを常に考えるようになった。

#### ●広島県／国立／男子／2年（当時）

##### 終了直後

高校の勉強は、いつかは役に立つかもしれないが、それがいつなのかはその時が来ないと分からないものだった。だからこそ、心構えをしておくという大きな意味があると思う。ワークショップで勉強の意味は十分すぎるくらい分かったので、あとは実践のみだと思う。やる気が出た。話したいことをたっぷり話せたし、こんな経験はなかなかない。

##### 3か月後

参加した人たちにメールなどをすると、あんな時の表情や言葉を思い出す。また、勉強が行き詰まった時、荻谷先生のお話を思い出すこともあった。皆が話した夢や目標などを思い出し、自分も頑張っている。相変わらず計画性がなく、勉強をやっているとよくめげられるのだが、少しは強くなった気がする。自分がやれることから取り組んでいくようにしている。

# 私たちにとっての勉強の意味、学校という場

「高校生未来プロジェクト」のワークショップに参加した3人の高校生が、参加した理由、ワークショップを通して気が付いたことやその後の自身の変化を語った。彼らの言葉から、高校生が学びに向かう鍵を探りたい。

## 参加者

岩手県・私立盛岡白百合学園高校 3年生(当時)

### 小池悠菜

こいけ・ゆうな



好きな教科は英語。放送部と、奉仕活動を行う社会生活動委員会に所属。趣味は音楽鑑賞。「負けず嫌いな性格だと思います」

栃木県・私立作新学院高校 1年生(当時)

### 山野上一輝

やまのうえ・かずき



好きな教科は英語。学校では風紀衛生委員を務めている。趣味は読書。「性格を一言で言えば、『恥ずかしがり屋』だと思います」

京都府立園部高校 1年生(当時)

### 八木杏奈

やぎ・あんな



好きな教科は倫理、美術、国語。射撃部と華道部に所属。趣味は友人との会話と読書。「性格は天真爛漫で、少し変わった人です」

## 1 何を期待して参加したのか

**山野上** 僕は、学校の先生から「こんなものがあるから参加してはどう？」と、「高校生未来プロジェクト（以下、PJ）」のチラシを渡されました。ちょうど成績が下がって、勉強のやる気も出ず、これからどのように勉強していけばよいかとモヤモヤした気持ちで悩んでいた時期だったので、チラシにあった『『学び』の意味』という言葉に興味を持ちました。他の人の話を聞いてやる気が出たらいいな……という気持ちでした。

**八木** 高校に入っているいろいろな人と出会うようになりましたが、周りの人は勉強や部活動で頑張っているの

に、私は納得のいく結果を出すことが出来なくて……高校生になったら変わりたいと思っていたのに、それが出来ていなくて悔しかったんです。勉強していても、なぜ勉強するのか、自分は何をしたのかよく分からなくて。そんな時、学校の進路指導室の近くの廊下にポスターが貼られていて、PJのことを知りました。PJで他の人と話したら、そう思ったことも少しは分かるのかなと思いました。また、このPJ参加を

きっかけにして、もっと積極的にやりたいとも考えました。

**小池** 私は2012年3月に実施された第1回PJに続き、2回連続で参加しました。前回は、白熱したディスカッションに最初は圧倒されましたが、とても面白く感じて心に残りました。でも、もっと自分の意見を言いたかったという思いもあり、今回も応募しました。当時、志望学部・学科は決めていたのですが、本当に自分はこの道でよいのかを考えていた時期でもあったので、そのモヤモヤした気持ちを今回のPJで解消できればいいなと思いました。

「学ぶ意味って何だろう？」

「自分の進路はこれでいいの？」

## 2 PJに参加して何を感じたのか

**八木** 最初はPJを楽しみにしていたのですが、次第に「議論なんて私に出来るのだろうか」と不安になってきて、PJ直前は緊張で寝られず、食べられずの状態でした。でも、参加してみると、皆が真剣に自分の目を見て話を聴き、うなずいてくれて。こんなことは初めての経験だったので、とてもうれしかったんです。自分とは違う世界の人と会えたことも楽しくて、初めて会った人ともすごい勢いで議論できました。人の意見を聞いた後に「私はこう思う」と違う意見を言ってもいいと分かったことも、うれしかったです。

**小池** すてきな仲間に出会え、一生の財産になったと思います。デイスカッションはもちろん、宿泊施設でも何時間もいろいろと語り合えたことが本当に楽しかったです。第1回のPJから、今でもSNS（\*1）で交流している仲間もいるんです。

**山野上** 僕は、このPJに参加するまでは、自分の考えを言葉に出すのが苦手でした。どうしても相手に遠慮してしまうんです。でも、PJでは思いをそのまま話せました。PJの後、気持ちを楽に、素直に人と話せるようになった気がします。あまり良いイメージを持っていなかった「勉強」をテーマに話し合えたのも新鮮でした。

たが本当に楽しかったです。第1回のPJから、今でもSNS（\*1）で交流している仲間もいるんです。



**八木** 学校では進路や勉強の話を避ける人も多いです。話してくれる子は話してくれるけど、「そういうことを考えると頭が痛くなるから止めよう」と言われたこともあります。触れてはいけない、暗黙の了解みたいなものがあるような気がします。でもPJでは、皆がその話をしようとしていました。そして、私の意見を聴こうという姿勢で、受け止めてもらえると、という信頼感もありました。

**山野上** 参加した人たちの意識が高かったからだと感じます。話す姿を見ればそれが分かりました。この人たちなら思っていることを話しても受け入れてくれる、皆の熱意をもらうことで、自分が変われるのではないかと思えました。そして、話し合ううちに、僕は勉強が嫌いなのではなく、ただ勉強を避けてきただけで、勉強の楽しさや奥深さに気付いていなかったのだと思ったのです。

**小池** このPJには、目標を持ち、頑張りたいと思っている人ばかりが集まっていたから、学校では話すが恥ずかしいことも、素直に話せたのだと思います。また、ファシリテーターの方が「今日の話題には正解はないんだよ」と最初に言ってくれたので、自信がない意見もどんどん言うことが出来ました。

## 3 初めて会った人となぜ議論できたのか

「皆が自分の目を見て話を聴いてくれる」

「勉強について話し合えたのが新鮮」

「相手の熱意をもらって自分が変わる気がした」

「正解がない話題だから、自信がなくても意見を言えた」

## 4 何でも話せる雰囲気は学校にあるか

**小池** もちろん学校にも信頼できる友だちはいます。でも、大人数になると、自分の意見を言いにくい雰囲気になるんです。少人数の中なら話しやすいけれど、それでも今回のPJのようなディスカッションにはなかなかありません。それに私の学校は、大学進学を目指している人ばかりだったので、勉強の意味など話す必要はないと皆思っていたのかもかもしれません。

**八木** 学校の友だちを大切にしたいから、話にくい部分には踏み込まない……そんな気持ちもあります。勉強の意味や自分の進路などについて話せる人もいるけど、大人数で話すという感じではありません。

**山野上** 勉強の意味や進路などについて話が出る人は、学校にはなかなかいません。もしかしたら、これまで自分があまり積極的に話し掛け

なかったことが原因かもしれません……。PJで知り合った人と、今も時々メールでやりとりをするんですが、その人とは勉強の意味や進路について話が出るようになる気がしています。



「勉強の意味は、話す必要がない」

「友だちを大切にしたいから踏み込まない」

## 5 議論してみても分かったこと

**八木** 私は、今まで自分の思いをためていたんだなあと思いました。自分の思いを否定されることを怖がっていたのだと、PJで自由に話したことでも気が付きました。

**山野上** 僕も、PJを通して、自分の中にいろんなものがたまっていたんだと気が付きました。生きることの意味などを1人で考えることがあっても、それをうまく人に話すことが出来なくて……。きっと学校の皆も、いろいろなことを考えているはずだと思うのですが。

**小池** 学校の友だちも、PJに参加すれば、普段ためていることを話し出すはずだと思います。すぐには意見が言えなくても、いろいろな人の考えを聞いていううちに、深まるものもあると思うのです。

**山野上** 勉強に対する考え方も変わりました。PJで人と考えを伝え合

うことはとても面白かったです。が、そのためには知識が必要だと痛感しました。勉強とは、人から情報を得て自分のものにしていくことだと思います。でも、今までの自分は、人から情報を得ても、頭の中で抜けてしまうことが多かったのです。人から得た情報を自分のものに変えていくプロセスを学ぶことも、大切な勉強だと思います。高校時代だけではなく社会に出てからも必要な、人とかかわるための勉強だと考えると、それまでマイナスイメージだった勉強がプラスイメージに変わったのです。これまでもモヤモヤと悩んでいたからこそ、PJの2日間をきっかけに気付けたことも多かったと思います。僕の考えも変わったのだから、学校の友だちがPJに参加したら、きっといろいろな考えが変わると思います。

「自分の中にいろんなものがたまっていた」

「人と考えを伝え合うために勉強したい」

## 6

## PJ後の自分自身の変化

**山野上** 今のままでだめだと思いましたが。PJで、志の高い人はもとも能力が高いたくではなく、努力によって今の姿があることが分かったのです。自分もそうなりたいたく、勉強を始めました。でも最近、以前の自分に戻ってしまつて……だから今は、あの時の気持ちを思い出して、自分を立て直したいです。

**八木** PJからの帰りの新幹線の中で、いろいろな気持ちがちやちやになつて、でもこんなうれしい経験は初めてで、なぜか泣いてしまったのです。そして、今回の経験をただの思い出にたくなかったので、地元ワークショップなどに積極的に参加し始めました。学校でもいろいろな人と話したいと思うようになり、先日、1度も話をしたこと

がなかったクラスメイトに話し掛けたんです。いろいろなことを知っている人だと分かり、その人ともっと話をするために、私も知識を増やしたいと思うようになりました。

**小池** 前回のPJで私は、東日本大震災の被災地である地元のことを全然知らないことに気が付きました。そこで、被災地でのワークショップなど、社会の現状を学ぶ場に参加するようにになりました。今回のPJでは、荻谷剛彦先生から「複数の分野の知識を蓄えて、新しい知識をつくらないと、社会の問題を解決できない」という話を聞き、入試科目ではない教科もちゃんと勉強しなければいけないと後悔しました。だから今、大学で幅広く学べるように、いろいろな本を読んでいます。

## 7

## 学校の授業に対する姿勢

**八木** PJに参加して、授業の受け方が変わりました。教壇に立っている先生も、私と同じ人間なのだといふごく当たり前のことをすごく意識するようになったんです。変な言い方ですが、私にはそれまで、授業は先生が一方的に話しているものだという固定観念がありました。でも、

先生も私と同じように意志や感情があり、私たちが授業をちゃんと聞かないと悲しいだろうと思うようになりました。PJで話を聞いてもらったことが私はうれしかったから、私も他の人に対してそうしていこうと思いました。

**小池** どんな授業でも「これはなぜなんだろう？」と自分から疑問を持つことを心掛けるようになりました。授業を聞いて、ノートに書き写

すだけで終わりではもったいない、何か自分の興味のあることを見つけて調べてみようと思う気持ちが生まれたんです。

**山野上** 僕は、これまでは教室の中に先生と自分しかいないような感じだったんです。でも、PJでいろいろな人と話しているうちに、周りの人とながつているから今の自分があると思うようになりました。そして、授業中も、周りの人に興味が向くようになったんです。勉強に真剣に取り組めないクラスメイトを見ると、その姿が、PJに参加する前の自分と重なるのです。そうした人たちに対して、僕は何かをしたい、話し掛けてみたいと思うようになりました。まだ、なかなか実行できないのですが……。

「学校でも、いろいろな人と話したい」

「入試科目ではない教科も勉強すべき」

「先生も、感情を持った人間だと気が付いた」

「今度は自分が他の人に何かをしたい」

## 8 学校で、語り合うことが出来るのか

**小池** 学校でも勉強の意味や進路について深く話し合える場所がもつとあったらいいと思います。でも、普段の友だちとの会話で、今回のPJのように白熱した議論をするというのは、あまりイメージが浮かびません。だから、違う学年の生徒を交えた少人数のグループなど、話がしやすい場所をつくってもらえればいいなと思います。そして、それを体育祭や合唱コンクールのように行事化するば、学校の中に日常的に深く話をする雰囲気が出てきて、皆自然と話せるようになると思います。ただ、PJのように、全国から集まった、会ったことがない人たちとも話したいです。両方の場があったらいいですね。

**八木** 中学生の時にディベートをしたのですが、よく話す人に頼ってしまい、自分はあまり話せませんでした。

「少人数のグループなど話しやすい環境が必要」

「自分が変わることで、周囲を変えたい」

た。だから、出来るだけ小さなグループで討論するのいいと思います。それから、やはり自分自身が変わろうとしないとだめなのかなと思います。私もそうですけど、人の姿は皆よく見ているものです。自分が変われば、周りの人はきつとそれに気が付き、少しずつ変化が広がっていくと思います。そんな良い影響を与えられる人になりたいと思います。

**山野上** 僕も、最初に自分が変わることが必要だと思っています。勉強のやる気が起きない人に、自分からいろいろと話を投げ掛けてみたいですね。昔の自分の状態を考えながら、なぜその人がそういう状態なのかと一緒に考えるうちに、そうした人たちも変わると思っています。そういった関係が広がれば、クラス、学年、学校全体が変わっていくのではないかと思います。

## 9 今、語り合いたいテーマ

**八木** 高校生だから、やっぱり「勉強ってどういう意味があるのか」について話してみたいです。私の周りにも勉強の意味についてすごく悩んでいる友だちがいるし、反対に勉強についてしっかりと目的意識を持っている人もいますので、悩んでいる人と目的意識を持っている人が話すことで、悩んでいる人に変化が生まれ、自分なりの目的意識を見付けられるような気がします。私自身、勉



強の意味は最初はよく分からなかったけど、PJでいろいろな人と語り合い、それから数か月、更に考える中で、「勉強は経験の1つ」なのかなと思うようになりました。勉強するという行動そのもの、頑張った経験によって、のちのち「あの時頑張ったから今も頑張ろう」と思えるような気がするんです。もちろん、いろいろな知識を身に付けることで、「これはこういうことじゃないのかな」と周囲の人たちと深くかわれるようになることもあると思います。ただ、今の私は「何のために勉強するか」は、のちのち分かることではないのではないかと、そしていつか役に立つだろうと思っています。今の私の考えについて、他の人はどう思うのか、クラスの人たちとも話してみたいです。

**山野上** これまでの自分は、自分のしたいことをやっていくというよりは、周りの人に流されて勉強していたように思います。だから実際、このままで自分は本当に幸せになれる

のか考えたこともあり。何があるのか、人の幸せなのか」ということをもつとを考えてみたいし、人と話してみたいです。お金があることが一番大切だという人もいるかもしれませんが、僕はお金よりも精神的なものが重要なんじゃないかと思っています。他の人たちはどう考えているのか、話をしてみたいです。

**小池** 私は被災地である岩手県出身なので、震災からの復興について、全国の皆と話し合いたいです。私の

「勉強の意味、人の幸せについて語り合いたい」

「震災からの復興について

目を背けることなく、話を聞きたい」

改めて

今思う、

勉強の意味とは

**小池**

こうなりたいたいという将来像に自分が近付くための一歩、素材の1つなのだと思います。だから、目標や夢がないまま長い道を走ると挫折するかもしれません。大きな目標があれば、いろいろなことに興味を持って勉強を続けてみようと思えるのではないのでしょうか。

**山野上**

生き方というか、問題の対処の仕方を学ぶためじゃないかなと今は思います。社会に出て、会社で仕事のやり方を教わる時も同じで、知識や情報をどう生かしていくか、そのプロセスを学ぶのが勉強だと思います。

**八木**

頑張ったらその分、将来の自信につながっていく、自分自身を形づくる経験の1つではないかなと思います。嫌いな教科を受け入れることが出来れば、いろいろな人も受け入れられるようになる気がします。

## 10 社会とどうかわわっていききたいか

**小池**

私は、震災からの復興にもっとかわりたい、日本の社会をもっとより良く変えたいと思うようになりました。PJで出会った人の中には「日本を変えたい」とはっきりと口にする人もたくさんいました。私も、大学で震災ボランティアのサークルを立ち上げ、PJのような対話の場をつくったり、イベントを開催したりしたいと考えています。

**山野上**

社会をもっと良くしたいと心の中では思っているけど、その思いを誰にも話せない人は多いのではないのでしょうか。自分もそうだと思います。

います。PJでは、そうした夢を話す人がいましたが、僕はまだまだ全てをさらけ出せなかつたです。まずは第一歩として、何か行動したいと思っています。

**八木**

PJに参加する前の私なら、「社会を変えるなんて私には……」とごまかしたかもしれません。でも今は、やってもいけないのに自分には無理だと決めつけたくないです。やってみて無理だつたら無理だと言えればいいかな、と。そして、実際に自分に何が出来なのか、もつともつと考えたいと思います。

語り合うことが難しい  
現代の高校生の日常

**編集長** 先生方には2012年12月

に行われた2日間の「高校生未来プロジェクト（以下、PJ）」と、3か月後の高校生座談会の様子（P.10）をご覧くださいました。まずはその感想からうかがいます。

**前田** PJを見学して印象的だったのは、高校生が「なぜ学ぶのか、自分はどう生きるのか」といったテーマで語り合うことに実はとても飢えていたということです。そして、PJから数か月が経った今もとても生き生きとしている様子を見て、語り合うという行為による生徒の変化、

# 学びの意味を模索する生徒に 私たちはどう向き合うのか

「学びの意味」「勉強・学問と社会のつながり」について悩みながらも考えようとする高校生の姿に、高校教師は何を感じたのか。「高校生未来プロジェクト」に企画段階から参加したオックスフォード大教授の荻谷剛彦先生と語り合う。

成長の大きさに驚きました。

**竹歳** PJ当日、あるグループの生徒が、「うちの学校の先生は進路の話といえば、どの高校からは東京大に何人合格したといった話ばかりしている」と話していました。私は、授業やLHRなどで、生きること、学ぶことの意味について自分の考えを話さず、生徒にも考える機会を与えない教師がいることを知ってとても驚きました。生徒には教科科学力だけでなく、知識の受け皿として豊かな人間性も必要なのに、それを育てようとしていない教師がいることにショックを受けました。

**荻谷** そうした中で、このようなPJが行われ、子どもたちの確かな変

容を見られたことは、大きな価値があったと思います。東日本大震災は、社会や人々の意識を大きく変える出来事でした。「知」の意味が問い直される中、「社会貢献と学び」は極めて重要なテーマですし、高校生と2日間接し、日本にはまだまだ秘めた力があると可能性を感じました。その上で、生徒たちの話を聞いて感じたのは、今の子どもたちは、自分を開示できない人間関係の中にがんじがらめになっているのだということです。それは教師との関係においてよりも、私は生徒同士の関係においての方が気になりました。今回の座談会でも、「進路の話題などについては触れてはいけないという



「暗黙の了解が日常にはある」という生徒の発言がありました。つまり、自分の生き方について話してもよいのは、今回のPJのような非日常の場なのです。子どもたちが生き方を考え、語り合う学校という日常の場がこわばってしまっていることを大人たちは強く意識し、打開を試みない限り、この状況がずっと続いていくこととなります。

### 語り合いの中で表れた 他者に貢献する意識

**前田** クラス担任を務めると、今の



### 苅谷剛彦

かりや・たけひこ

東京大大学院教育学研究科教授を経て、2008年度より、オックスフォード大教授。専門は教育社会学、比較社会学。主な著書に、「学力と階層 教育の綻びをどう修正するか」（朝日新聞出版）など。

高校生にとって、自分はどう生きるかといったテーマは、とてもデリケートな話題なのだと実感します。だから正直に言うと、それを話していくに雰囲気をあえて壊そうという積極的な意識は私にはありませんでした。ただ、今回のPJで生徒たちが自分をさらけ出し、そして語り合う中で「相手の熱意をもらって自分も変わる気がした」と成長していく様子を見ると、自分たち教師が彼らの中の変わりたいという意欲を引き出すことがもつと必要なのだと思います。



### 竹歳真一

たけとし・しんいち

教職歴22年。鳥取県立倉吉東高校、鳥取県立倉吉総合産業高校などを経て、2013年度よりマレーシアのマラヤ大予備教育学部日本留学特別コースに日本政務派遣教師として勤務。担当教科は数学。

**苅谷** もしかすると、今回のPJで社会や生きることについて他者と語り合い、共に考える経験をした生徒は、閉塞した日常に戻った時に悩み、苦しむことがあるかもしれません。それは高校教育だけの問題ではなく、高校が生徒にとって自分を語り、他の人の生き方から学ぶ場になっただけでも、日本の社会は特別困ったことにはならないという、そのこと自体が大きな問題だと思います。深く考え語り合うこともない人間をつくったほうが社会にとって都合がよく、それでもこれまでの日



### 前田幸男

またた・ゆきお

教職歴14年。鳥取県立鳥取東高校、鳥取県立倉吉西高校を経て、2005年度より鳥取県立鳥取中央英英高校に勤務。進路指導部所属。担当教科は数学。

本はなんとかやってこれたのです。しかし、これからもそのままでは、社会が緩やかな衰退をたどっていくようにしか私には見えません。今回のPJに参加し、語り合う生徒たちを見ると、彼らは学校や社会の現状に無意識に疑問を感じていて、それが語り合うことへの「飢え」として表れたのではないかと思いました。  
**竹歳** 私は、教師として、そうした状況は変えたいと思います。私自身、生徒に対して一人の人間として、怒りや喜びをあらわにしてぶつかってきました。まずは教師が本音で社会に対する考えを語り、教師同士でも議論すれば、それが生徒にも伝わっていくのだと思います。  
**編集長** 生徒と生徒、そして生徒と教師という関係で、考えを伝え合い、喜怒哀楽を感じる場面もあってよいということでしょう。「自



### 小泉和義

こいずみ・かずよし  
「VIEW21」編集長



分が話した時に目を見て聴いてくれたから、うなずきながら聴いてくれたから、自分も真剣に聴こうと思った」「この人たちなら、違う意見を言っても受け止めてくれるのではないかと信頼できたし、自分も受け止めようと思った」と生徒たちは話していました。今回のPJは「社会貢献」がキーワードの1つでしたが、自分の心をさらけ出して語り合うことで、相手のための自分であろうとする姿勢になっていったのは、社会貢献意識の表れだと思いました。

「自分とは違う考えを持つ他者と生き方を語り合うことで、生徒の内面に変わりたいという強いエネルギーが生まれていた」前田



「子どもたちの日常がこわばってしまっていることを、大人たちは強く意識し、打開を試みない限り、この状況は続いていく」苧谷

まで通りの関係でよいとは言えませんが、

苧谷 私は「何のために学ぶのか」

を拙速に問う風潮は、日本的だと考えています。他の国々では、学問を通じて社会問題を解決していくことは当然のことです。それは知識を身に付けた者の義務であり、権利だからです。それが迂遠なことも知っています。もう1つ、他国と比較して感じたのは、日本の高校生の幼さです。PJに参加した高校生は、皆、高い志を持っていましたが、それでも議論を進める視点や方法、社会の現状に対する知識の不足を痛感しました。これは高校生や高校教育というよりもむしろ、日本の社会の問題だと思えます。しかし、社会が悪い

### 日常のかかわりの中で生徒の意識を大きく広げる

編集長 とはいえ、PJの内容を、そのまま学校の日常に移行しようというのには現実的ではないでしょう。日常の全てを変えるのではなく、学

校行事や「総合的な学習の時間」あるいは授業の一部などで意図的に非日常の場をつくっていくのは1つの方法だと思います。その際、もっと積極的に学校外の組織と連携することも必要ではないでしょうか。

苧谷 教師個人が持っている枠組みで理解する生徒と、外部の人間の感性で理解できる生徒は同じではないでしょう。教師が全てを背負うのではなく、外部の力も活用して、複数の視点で生徒を育てていく意識を持つことは私も大切だと思います。

竹歳 ただ、外部の力をどのように生かすのが重要ですね。PJ当日、「学校で職業人の講演会などがあっても、寝ている生徒が多い」と話していた生徒がいましたが、それは学校が悪い意味で外部に全てを委ねてしまい、その取り組みの価値を生徒に事前に説明できていないからです。ゲストの話から何を学んでほしいのか、教師が自分の言葉で説明できるかどうか、生徒に考えてほしいことを提示できるかどうかで、そのイベントに魂が込められ、生徒のアンテナも高くなるのだと思います。

編集長 それは日常の指導にも通じ

るお話ですよ。授業やLHRなどの日々の指導の中で生徒が変わっていきつきかけをつくるために、どんなことを大切にしていますか。

**竹歳** 「自分の話を聞いてくれるから自分も聴こうと思った」と話す生徒がいましたが、それは教師と生徒との日常の関係でも同じです。教師が生徒に関心を持ち、その生徒の変化の瞬間を捉えて褒めてやるこゝとが出来れば、生徒はその教師の言葉に耳を傾けます。たとえ大きな成長でなくても、その生徒がもがいているからこそその変化であれば、それを的確に捉えてすぐに声を掛ける。他の生徒の前で褒めたり、声を掛けたりすれば、生徒同士の目が向き合い、関係性も豊かになっていきます。外部の力を生かすことも必要でしょうが、日常のかかわりの中で自己肯定感を高め、他者、社会へと意識の広がりをつくるのは教師の使命だと私は思います。

だと思えます。生徒の悩みは、家庭の問題など、簡単には他言できないものである場合もしばしばで、だからこそ、生徒の表情を読み取った上で掛ける私たちの一言で、彼らの気持ちや行動が劇的に変わることもあります。面談をして、生徒と一緒に小さな目標を決め、そして次の日、その次の日と少しでも変化があれば褒める……生徒が他者にかかわって

いこうとするためには、その土台として学校が生徒にとって安心して生活できる場所になることが必要だと思います。

**荻谷** 「先生が人間なのだと思うようになった」というショックな生徒の言葉もありました。多くの生徒にとっては、学校はすでに自分の本音や弱みを見せられない場所、耳を貸してもらえない場所になっていくのかもしれないという危機感が必



**「生徒に関心を持ち、日常のかかわりの中でその自己肯定感を高め、他者、社会へと意識の広がりをつくるのは教師の使命」** 竹歳

要だと思えます。

**竹歳** 教師が自分を語り、生徒に自分を語らせることがどれくらい生徒を変えるのか、全ての教師がそれを体感しなければいけないと思います。今回のPJで生徒に生まれた変化は、どの生徒にも起こりうるものだと私は思っています。しかし、もしも「特別な生徒が集まったから変化したのだろう」と思っていってしまう先生がいるのなら、ぜひPJの様子などを動画で見ていただきたいです。きっと「普通の生徒がここまで変わるのか」と驚き、自分への刺激になるはずです。そして、自分たちの学校で生徒の変化、成長を促す指導が出来ているのか、そのための校内研修などが行われているか、厳しく見直すことの必要性を感じるはずで

**前田** 今回のPJには、学力的には

多様な生徒が参加していましたが、学力や進路が一律ではない生徒同士で学びが生まれていました。いわゆる教科学力において、下位層に位置する生徒たち全員がすぐに今回のような形で「学び」を考えることは難しいかもしれませんが、この実践から考えられることは大いにあると思います。

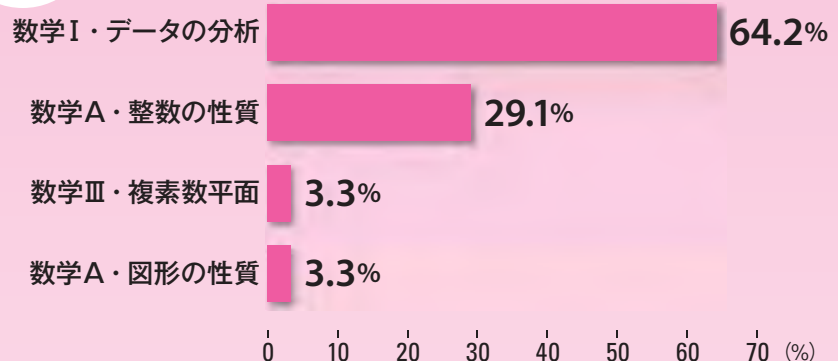
**荻谷** 「主体的に学ぶ生徒を育てる」と言いますが、それは「生徒の思いのままにさせる」という意味ではありません。主体的な学びを成立させる場面を設定するのは教師の仕事であり、それは大学でも同じです。今、生徒たちが敏感に感じている閉塞感を崩していくために、理想通りに行かないところは外部の力も借りながら、多様な場面を学校の中につくり出していくことが必要だと思います。

## 数学

# 指導の工夫によって 生きる力を育みやすい 2つの新設分野

新課程が全面実施となり、新しい学習内容での授業が進んでいるが、学習内容が増加する中、言語活動の充実や知識・技能の活用重視など、指導に工夫が迫られている。そこで、新課程での教科指導において、指導現場が直面している課題と課題解決のヒントとなる取り組みや現場の声を紹介していく。初回は2012年度に先行実施された数学。多くの教師が課題に挙げた新設分野の「データの分析」と「整数の性質」の指導について考える。

## 数学で指導に困ることが予想される分野



「データの分析」は生徒の反応や理解度が予測できないこと、授業での到達目標の設定が難しいことなどが、「整数の性質」は中学校までの必要な知識の習得が未知数であること、低学年で指導すべき部分と入試対応の部分をきちんと考えた指導が必要になってくることなどが、困ると予想される理由として挙げられた。

出典/ベネッセコーポレーション 進研模試 2013 年度「教科に関するアンケート」

学校事例 1

福井県立武生高校

入試での出題予測を基に  
対応力を高め  
言語活動や課題学習を導入

分野の性質を踏まえて  
履修時期を決める

福井県立武生高校では、「数学Ⅰ」「数学A」を直列履修とし、科目ごとではなく、クラスごとに担当を割り当てている。2012年度の履修順序は、「数と式」(数学Ⅰ) ↓ 「2次関数」(数学Ⅰ) ↓ 「場合の数と確率」(数学A) ↓ 「整数の性質」(数学A) ↓ 「図形の性質」(数学A) ↓ 「図形と計量」(数学Ⅰ) ↓ 「データの分析」(数学Ⅰ) だった。

新課程で「数学A」に新設された「整数の性質」は、1学期の期末考査後から夏休み明けにかけて履修させた。この分野は他の分野に比べて、

整数問題に関する内容が  
系統化され、学びやすくなった

単元間の関連性が低いため、学習途中で夏休みが入り、授業の間隔が空いても、支障を来しにくいという考えだ。また、「数学Ⅰ」に新設された「データの分析」を履修順序の最後に置いたのは、他校の指導状況なども踏まえて授業内容を検討したという考えによる。ある程度状況が見えてきた13年度は、「データの分析」を「整数の性質」と「図形の性質」の間で履修させる予定だ。

「整数の性質」の具体的な指導内容から見ていこう。

「整数の性質」は、1つの分野に

位置付けられたことによって、いわゆる整数問題として扱われてきた内容の基礎部分が系統化された。そのため、整数問題に関する内容が教師にとっては教えやすく、生徒にとっては学びやすくなったのではないかと、西繁寿先生は話す。

「これまで整数問題として出題されていた内容は、明確に特定分野に属するものではなかったため、自分が学習してきたことを生かすきれずに戸惑う生徒が、少なからずいました。新課程で1つの分野として確立され、整数問題を解く際のベースとなる内容が授業できちんと学べるようになったことで、理解しやすくなったと思います。指導する側としては、指導内容は基本的には整数問題をとり扱う時に教えていた内容を整理するだけなので、大きな混乱はなかったといえるでしょう」

従来、整数問題は、入試では東京大や京都大、一橋大など、一部の難関大を中心に出题されてきた。今後は、「先行実施された学年の受験年を待たず、より多くの大学で出題されるようになるのではないか」と西先生は予測し、状況が変化していく



福井県立武生高校  
西繁寿  
にし・しげひさ  
教職歴20年。同校に赴任して8年目。進路担当、3学年副主任。

福井県立武生高校

- ◎ 2008～12年度、SSHの指定を受け、21世紀型の理数カリキュラムおよび「持続可能な開発のための教育プログラム」の研究開発に取り組み。
- ◎ 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎ 1学年約340人
- ◎ 2013年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東京大、金沢大、福井大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに215人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ325人が合格。

と見通している。

整数問題への対応力は  
3年間を通して育成

同校では、整数問題は「数学A」だけではなく、3年間を通して積み上げていくことを重視する。

「整数問題は、解法をパターン化しづらく、条件の設定によってはいくらでも難しくすることが出来る、奥の深い内容を含んでいます。そのため、入試直前の短期間では難関大レベルの力を付けるのは難しく、時間を掛けて対応力を付ける必要がある

図1 「整数の性質」や整数問題と関連の深い分野

数学I・A

- 【数と式】
- ・無理数の整数部分と小数部分
  - ・不等式を満たす整数
  - ・不等式の整数解(+文章題)
  - ・絶対値を含む方程式・不等式
  - ・剰余類分類(表示)
  - ・四則演算について閉じている
  - ・倍数・約数、倍数の判定
  - ・命題と整数

【2次関数】

- ・2次関数の最大・最小(実数、整数)
- ・因数分解と因数の絞り方
- ・2次不等式と整数
- ・連立2次不等式と整数

【場合の数と確率】

- ・ $nCr$ の性質

【図形と計量】【図形の性質】

- ・図形を作る整数値

数学II・B

【複素数と方程式】

- ・ $\omega$ と循環、剰余類

【図形と方程式】

- ・領域と線形計画、格子点

【指数関数】

- ・桁数の問題、最高位、 $7^n$ の1の位
- ・不等式を満たす整数

【数列】

- ・ガウス記号、群数列
- ・格子点
- ・等差数列の共通項
- ・等差数列と等比数列の共通項
- ・漸化式との融合

\*西先生の資料を基に編集部で作成

図2 西先生が2年生文系クラスの学年末考査で出した問題と解答例

数列  $\{a_n\}$  は、初項が1、公比が2の等比数列である。次の問に答えよ。

- (1) 一般項  $a_n$  を求めよ。
- (2)  $a_n$  と  $a_{n+2}$  を3で割った余りは等しいことを示せ。
- (3)  $a_n$  を3で割った余りを求めよ。

〈解答例〉

- (1)  $a_n = 2^{n-1}$
- (2)  $a_{n+2} - a_n = 2^{n+1} - 2^{n-1} = 4 \cdot 2^{n-1} - 2^{n-1} = 3 \cdot 2^{n-1}$  だから  $a_n$  と  $a_{n+2}$  を3で割った余りは等しい。
- (3)  $a_1 = 1, a_2 = 2$  だから、(2) より、 $a_n$  を3で割った余りは、 $n$  が奇数のとき1、 $n$  が偶数のとき2

\* (2) の別解として、「二項定理を用いる」「数学的帰納法を用いる」などの解法も考えられる

\*西先生の資料を基に編集部で作成

ります」(西先生)

そこで、「整数の性質」の学習時は、基本的に教科書の範囲にとどめ、まずはしっかり土台を固められるよう指導した。その後、他の分野を指導する際に、適宜、その分野に関連する整数問題を扱っている(図1)。

「他の分野を学ぶに連れて扱える問題の幅が広がっていくのが整数問題の特徴」と西先生が言うように、整数問題は「数と式」「場合の数と確率」「数列」など、親和性の高い分野が多い。定期考査でも、年間を通して、入試を意識した整数問題を

「整数問題は抽象度が高く、解法がパターン化しづらいために難問が少なくありません。しかし、他の分野に比べ、前提として必要な知識が多くなり、数学が得意・不得意にかかわらず、皆、同じスタートラインから取り組めます。更に、その性質ゆえ、『整数の性質』や整数問題の指導を通して、数学は解法を覚えれば解ける教科書と思っている生徒の誤解を正し、数学の面白さに気付いた

生がよく勧めているのが、具体的に書き出すなどの実験を行うことだ。「数学の好き嫌い、得意・不得意に関係なく、具体的な値で考えたり、図を描いたりすることに、生徒は本当に楽しそうに取り組めます。そして、そうした実験を繰り返す中で、ある法則を見つけた時、とてもうれしそうな表情を見せます。整数の世界は奥深く、最終到達地点はとても高いかもしれませんが、それぞれのレベルに応じて知的なドキドキ感・ワクワク感が得られ、学習意欲を喚起させられる分野といえます」(西先生)

また、「データの分析」の指導に目を向けた。同校では、この分野についても、1年生での学習範囲は教科書の内容にとどめている。旧課程では、「数学B」「数学C」に「データの分析」の要素である統計が含まれていたが、入試ではごく一部の大学でしか出題されていなかったことが、その

また、整数問題は、1つの問題に対して複数のアプローチ法があるものが多いため、生徒の学び合いを促しやすく、新課程で全教科において導入が求められている言語活動にも適した分野と考えている。同校は、08年度から5年間、スーパーサイエンスハイスクールの指定校として理数教育の研究に取り組んできたが、その一環として1年生全員を対象に設けている「サイエンス・コミュニケーション(SC)」で、ユークリッドの互除法を用いて最大公約数を求める問題をグループごとに議論しながら解くなど、言語活動を取り入れた授業を展開している(図3)。

「データの分析」の指導で社会を生き抜く力を育てる

次に「データの分析」の指導に目を向けた。

**図3 武生高校が行った課題学習の一例**

テーマ○「ユークリッドの互除法と最大公約数」

課題○長方形から正方形を切り取りながら、ユークリッドの互除法の仕組みを理解し、最大公約数の求め方を探る。

内容○12×18の紙を出来るだけ大きな同サイズの正方形に切り分ける問題を各自が考え、その後、グループごとに議論することにより、ユークリッドの互除法の図形的な意味を理解していった。次に364と1001に対して、図を用いずに割り算と余りに注目して、これらの数の最大公約数を求め、発表した。数が大きくなったり、複雑になつたりしても最大公約数が容易に求められることで、ユークリッドの互除法の優秀さが確認できた。

\*西先生の資料を基に編集部で作成

理由の1つだ。「整数の性質」とは異なり、今後も国立大の個別学力試験では出題されることはあまりないと考え、センター試験での出題に絞って指導する方針だ。

「『データの分析』の内容を個別学力試験レベルの問題とするには、多量のデータが必要です。そうすると多くの計算が必要になります。入試で『データの分析』にそれだけの時間を割く問題を出すとは考えにくく、旧課程の『論理と集合』のような出題の仕方（大問1の小問）になるの

ではないでしょうか」（西先生）

ただ、入試ではあまり大きく扱われないと予想するが、学習内容自体はこれからの社会を生きていく上で非常に重要な内容だと、西先生は捉えている。

「デジタル化が進む知識基盤社会や情報化社会に対応するためには、統計的な視点から物事を客観的に捉える視点や手法が欠かせません。『データの分析』が『数学Ⅰ』に新たな分野として追加された意味は、実生活におけるさまざまな場面で自ら考えて判断する力の基盤を形成することにありたい。そうした学習の意義を、生徒によく理解させる指導を心掛けています」（西先生）

また、学習内容をより深めるために、データ分析が必要とされる理科や、一部の内容が重なる情報科との授業での連携も検討している。

**新設された2分野は課題学習にも適している**

新課程では、「数学Ⅰ」「数学A」に、生活と関連付けたり、学習した内容を発展させたりして、生徒の関心や意欲を高める課題を設け、数学

的活動を特に重視して行う課題学習が内容に位置付けられている。実験などの試行錯誤を繰り返す中で本質を見抜く力を育てる「整数の性質」、多角的な視点を身に付ける「データの分析」は共に、生徒の主體的な学習を促し、数学を学ぶ良さを認識させやすいという点で、課題学習に適していると西先生は考えている。

そこで、前述のように、1年生の

SCで言語活動も取り入れる形で課題学習を行っている（図3）。

「限られた時間の中でも効果の高い学習となるように心掛けています。ただ、課題学習の質は、どのタイミングで、どれくらい時間を掛け、どのような内容を学ぶかによって大きく異なります。教師の力量が問われることを常に肝に銘じて指導を工夫していくつもりです」（西先生）

**学校事例 2**

**三重県立白山高校**

**新設2分野の内容を活用し生徒の基礎学力を育む**

**新設の2分野は学び直しに生かしやすい**

三重県立白山高校では、普通科は1年次に「数学Ⅰ」「数学A」を並行して履修し、情報コミュニケーション科は1年次に「数学Ⅰ」、2

年次に「数学A」を履修する。いずれも教科書の章立てで順に進めることを基本とし、「数学Ⅰ」に新設された「データの分析」は、普通科・情報コミュニケーション科共に1年次の3学期に、「数学A」に新設された「整数の性質」は、普通科は1年

次の3学期、情報コミュニケーション科は2年次の3学期に学ぶ。

基礎学力の定着に課題がある生徒が多い同校では、以前からベネッセの『マナトレ』(\*1)を用いて、義務教育段階の学習内容を定着させるための活動に取り組んできた。新課程で新設された2分野には、中学校で学んだことを再確認する内容が含まれているため、学び直しの効果が高まるだろうと、浦崎幸士先生は期待を寄せる。

「『データの分析』に百分率(\*2)、『整数の性質』に約数と倍数など、旧課程では扱わなかった内容が新設の2分野に盛り込まれたことで、これまで『マナトレ』だけで行っていた学習が教科書を使って出来るようになりました。学び直しに該当する内容の説明や演習に時間を掛けられるようになるので、生徒が理解しやすくなると思います」

### 基礎を丁寧に説明してから問題演習に取り組ませる

「データの分析」では、相対度数や平均値など、中学校の数学の「資料の活用」で既に学習した項目に重

点を置く。

「既習内容の復習ですので、生徒は取り組みやすいはずですし、学び直しに直結します。また、相対度数を求める時に行う割り算の計算などは、就職試験でも生きてきます」(浦崎先生)

授業では、まず教科書の例題を用いて、位取りや小数について丁寧に説明すると、浦崎先生は言う。

「小学校の算数段階でつまづいたまま数学に苦手意識を持っている生徒が多いため、『÷10であれば左に1つ、÷100であれば左に2つ、小数点を動かす』というように、具体的に解説します。少しでも分からないことがあれば何でも質問するようにに生徒に呼び掛け、全員が理解してから先へ進むようにしています」  
そして、15分間、浦崎先生自作の類題プリントに取り組ませる。

「10や100で割る計算は、日常生活でよく使いますし、就職試験でもよく出題されます。÷10の計算から始め、÷20の計算を暗算で出来るようになるまで、何度でも繰り返し返して解かせ、しっかり定着させたいと考えています」(浦崎先生)

### 生徒が挙げた数字を使うなど 作問に工夫を凝らす

「データの分析」で扱う項目のうち、高校で初めて学習する分散と標準偏差では、2乗や平方根の計算が必要になる。そのため、基礎的な説明が更に重要になると言う。

「必ずと言ってよいほど、生徒は2乗や平方根の計算につまづきますが、それは計算の仕方が分からないからだけではありません。なぜ分散を求める際に偏差を2乗するのか、なぜ標準偏差は分散の正の平方根なのかといった、数学の本質的な部分に疑問を持っていることも、つまづきの原因になっています。生徒はそこに納得して初めて、分散や標準偏差の計算に前向きに取り組むようになるので、しっかり説明する必要があります」と考えています」(浦崎先生)

生徒が取り組みやすいように、作問にも工夫を凝らす。  
「分散や標準偏差は生徒にとって難しい内容です。生徒の関心を引くような問題を生徒と共に作ることで、学習意欲を高める試みをしています。例えば、『30歳になった時、



三重県立白山高校  
浦崎幸士  
Yukihiko Urumi  
教職歴13年、同校に赴任して7年目。生徒指導部主任。

### 三重県立白山高校

◎2007年度、文部科学省「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究における推進校」に指定され、2年次の夏休みに全員が5日間のインターンシップを行うなど、生徒の職業意識を高める活動に力を入れている。

◎全日制/普通科・情報コミュニケーション科/共学

◎1学年約100人

◎2013年度の進路実績/進学26人(4年制大5人、短大3人、専門学校18人)、就職66人。

月給はいくらほしい?」と尋ね、生徒から挙げた金額を用いて分散や標準偏差を計算させるなどの工夫をしています」(浦崎先生)

### 「出来る」と感じさせた上で 数学的な意味を説明

「整数の性質」で力を入れる単元は2つある。

1つめは約数と倍数の単元だ。就職試験でも出題頻度の高い項目であり、特に最大公約数、最小公倍数については丁寧に説明し、その求め方を授業中の問題演習を通してしっかりと身に付けさせている。

\*1 ベネッセの「進路マップ」の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材。  
\*2 百分率を扱わない教科書もあります。

図4 素因数分解の指導

「540を割り切る素数は何か？」と尋ねても、生徒は分からないため、「540を割り切る数で最も小さい数は何？ただし、1は駄目だよ」と質問する。生徒は2で割り切れそうだと気づき、540を2で割る。次は、「270を割り切る数で最も小さい数は何？ただし、1は駄目だよ」と問う。これを繰り返せば、数学が苦手な生徒も素因数分解が出来る。素因数分解の計算に慣れてきたら、素数や因数、素因数について説明する。

$$\begin{array}{r} 2 \overline{) 540} \\ 2 \overline{) 270} \\ 3 \overline{) 135} \\ 3 \overline{) 45} \\ 3 \overline{) 15} \\ 5 \end{array}$$

\*浦崎先生への取材を基に編集部で作成

最大公約数や最小公倍数を求める際に必要な素因数分解の指導では、「1以外のなるべく小さな正の数で割っていいこう」と、数学的な厳密さはひとまずおき、易しく説明してから、繰り返し問題演習をさせる(図4)。

「大半の生徒は、中学校で習った素数や因数を覚えていません。いきなり数学的に厳密な説明をしても理解できないので、まずは計算の仕方を覚えさせ、素因数分解が『出来る』と感じさせた上で、素因数分解とはどういうことなのかを解説するのが

効果的です」(浦崎先生)

「数学Ⅰ」の「数と式」では、素因数分解の知識が必要な根号を含む計算を扱うため、次年度以降は「整数の性質」と並行して扱うこともあり得ると、浦崎先生は話す。

「生徒が理解しやすく、計算の仕方が身に付きやすいように、『整数の性質』の履修時期を『数と式』と同じ1年次の1学期にすることを検討しようと思っています」

**インパクトを強くするため  
あえて大変な計算を先に**

「整数の性質」の重点単元の2つめは、ユークリッドの互除法だ。ここでは、あえて問題演習を行ってからユークリッドの互除法を説明すると、浦崎先生は話す。

「大きい数を含む2つの整数の最大公約数を求める場合、素因数分解をして求めようとすると、計算量が多く大変ですが、ユークリッドの互除法を用いれば、比較的簡単に求められます。ただし、生徒にはその方法をいきなり教えません。まずは、あえて素因数分解をする方法で最大公約数を求めさせます。その計算量

の多さに生徒は大変な思いをするでしょう。そこで、ユークリッドの互除法を説明すれば、『こんなに便利な方法があるのか』と生徒の印象を強くすることが出来るのです」

1次不定方程式では、グラフを用いて整数解の意味を理解させる。

「まず、連立方程式の解が2つの直線の交点であることを説明した上で、『直線が1つしかない1次不定方程式の解はどうなるのだろうか』と問い掛けます。そして、『整数解は直線上のx座標とy座標が共に整数である全ての点であり、それらを全て書き出すことは出来ないけれど、kなどの文字を使えば、全ての整数解を表せるよね』といった流れで解説すれば、生徒の納得度も高まります」(浦崎先生)

**学び合いにより深まる  
生徒の理解**

新課程で重視されている言語活動は、問題演習の時間に生徒同士で学び合いをさせるなど、新課程実施前から授業に取り入れていた。

「入学時から学び合いを続けていると、問題を解けた生徒が、自分か

ら進んで解けていない生徒に教えるようになります。相手に分かるように説明することで、自分も理解を深めているようです。また、問題が解けない生徒も、友だちが相手だと気兼ねなく、納得のいくまで質問できるように、一斉指導よりも理解が深まる部分があるのだと思います。新設の2分野でも学び合いを行い、学習内容の定着を目指しています」(浦崎先生)

生徒に解ける喜びを感じさせるために、定期考査では授業で扱った問題を、数字を替えた形でそのまま出題する。

「授業をしつかり聞き、演習プリントに取り組んでいけば、定期考査の問題は解けるようにしています。『自分もやれば出来る』と実感させることで、生徒の学習意欲を高める狙いがあります」(浦崎先生)

浦崎先生は今後のように話す。「新課程で新設された2分野では、割り算を始め、約数、倍数など、社会で求められる知識を学び直せます。生徒に基礎学力が定着するよう、引き続き工夫をしていきたいと思っています」



石川県立  
にしきがおか  
金沢錦丘高校

思考力育成

# 全校体制で言語活動を取り入れ、論理的・批判的思考力を育成

◎1899年創立の石川県第二中学校が前身。2004年度に石川県立金沢錦丘中学校を併設し、県内唯一の公立の併設型中高一貫校となる。「弘毅篤学」を校訓として、高い志を育み、豊かな心と知性、健やかな身体を培い、地域や国家、国際社会の持続可能な発展に貢献できる人材の育成を目指す。

設立	1963(昭和38)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、一橋大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、立教大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ468人が合格。
住所	〒921-8151 石川県金沢市窪6-218
電話	076-241-8341
Web Site	<a href="http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~nisikh/NC2/">http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~nisikh/NC2/</a>

## 変革のステップ

### 背景

◎中高一貫校となり進学実績が向上する一方、生徒の学習は暗記中心で、論理的・批判的思考力の育成に課題があった

STEP 1

### 実践

◎表現学習教材の導入、コミュニケーション主体の科目の設置、言語活動重視の授業などにより思考力を高める

STEP 2

### 成果

◎国公立大合格者の実績が過去10年間で最高を記録。論理的・批判的思考力の向上を実感する生徒が増加

STEP 3

## 暗記中心の学習が 学力向上の妨げに

石川県立金沢錦丘高校が、2012年度から言語・表現活動の充実に取り組み始めた背景には、生徒の論理的・批判的思考力の低下という課題意識があった。04年度に併設型中高一貫校となって以来、進学実績の面では着実に成果を上げてきた。しかし、それは成績上位層のけん引によるものであり、成績中・下位層との学力の差は大きかった。加えて、新たな課題も浮き彫りになっていった。表純一校長はこう言う。

「本校に赴任した頃の指導は、多くの教科が復習中心だったため、生徒には授業で習ったことを覚える暗記型の学習に偏る傾向が見られました。しかし、そうした短期記憶に頼る学習では、覚えたことの多くは定期考査が終われば忘れてしまいます。確かな学力を身に付けるためには、知識の体系化に必要な論理的・批判的思考力を育成することが必要だと考えました」

教務主任で物理担当の多井伸明先生も、生徒の特徴を次のように述べる。

「定期考査で不正解だった問題を再テストすると生徒はきちんと答えられますが、少し内容を変えて同じような問題を出すと、もう出来なくなる。生徒は単に解法の過程を覚えているだけで、なぜそういう解き方をするの

かという本質まで理解していませんでした」成績中・下位層の学力を底上げして学校全体の学力向上を図ること、そして、10年後、20年後の社会で活躍できる力を育むためには、生徒の論理的・批判的思考力の育成が課題だった。

## 言語活動主体の総合学習で コミュニケーションの型を習得

同校が論理的・批判的思考力育成の柱の1つ



石川県立金沢錦丘高校校長  
**表純一** おもて・じゅんいち

教職歴37年。同校に赴任して3年目。「目の前の生徒の実態把握が全ての出発点である」



石川県立金沢錦丘高校  
**多井伸明** たい・のぶあき

教職歴32年。同校に赴任して4年目。主幹教諭  
教務主任。「生徒の可能性は誰にも決められない」



石川県立金沢錦丘高校  
**三藤加代子** みつじ・かよこ

教職歴26年。同校に赴任して3年目。1学年主任  
「生徒のチャレンジ精神を育てる指導を心掛けていきたい」



石川県立金沢錦丘高校  
**浅井千雅** あさい・ちが

教職歴6年。同校に赴任して6年目。1学年担任  
「常に前向きに！可能性は無限大」

\*2013年4月から、表校長は石川県教育委員会教育次長兼教員指導力向上推進室長に、多井先生は石川県立小松工業高校教頭に着任されています

に据えているのは、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)で実施する「表現サポート学習」だ。ベネッセの『表現トレーニング』(\*1)を教材とし、個人ワークやグループワークを通して、自分の考えを表現する方法を学ぶ。1年次では、『表現トレーニング』を使い、自分の意見を述べるために必要な力を段階的に身に付けていく。そして、2年次では、身近なテーマをさまざまな角度から考察して、自分の考えを整理すると共に、グループワークで他者の意見を知ることを通して、総合的に表現力を高めていく。

「表現活動の一環として小論文学習を行ってききましたが、自分1人で考えて書くだけでは思考が深まりません。表現サポート学習は、大勢の人の意見を読んだり、聞いたり、評価したりすることによって、自分の考えを広げ、深めることを狙いました」(多井先生)

毎時間、授業の導入には、ペアワークの「問答ゲーム」を取り入れた。「あなたは○○が好きですか」「○○と△△のどちらが好きですか」といった簡単な問いを設定し、相手に自分の考えを筋道立てて述べたり、情報を正しく伝えたりする。答えは「好き」「嫌い」など与えられた立場で意見を述べ、終わると立場を変えて同じ問答を繰り返す。ここで大切なのは、問答時のルールだ。話す時は、主語や目的語を明確にする、根拠や理由を述べる、他人の意見を尊重

するというルールにのっとる。そうして、ディベートやディスカッションにつながるコミュニケーションの型を身に付けられるようにした。

## 言語活動の達成度を評価する 「論理力テスト」を試行

論理的・批判的思考力の育成では、学習の成果をどのように評価するのも課題となる。同校では、『表現トレーニング』の成果を評価する方法として「論理力テスト」を試験的に作成した。

「論理的・批判的思考力を測る場合、定性的な評価になりがちですが、それでは時間が掛かる上に、評価者によって結果にぶれが生じる可能性があります。論理力テストによって定量的な評価を行うことは、そうしたぶれをなるべく少なくするためのアプローチの1つだと考えています」(表校長)

論理力テストは、国語、地歴公民、理科、英語の各大問1問、計4大問から成る。試験時間は45分だ。問題は一見、生徒にとって未習内容に思えるが、実は解答に必要な知識は義務教育レベルだ。「このグラフを見て、考えましょう」「このデータから論理的に考えると、どういう解答になりますか」というように、知識量よりも、いかに論理的に考えられるかが問題を解く鍵となっている。

\*1 ベネッセの小論文・表現学習教材。書いて伝えることを通して、生きた表現力を総合的に育成することを目指している。  
\*プロフィールは2013年3月時点のものです

## 「LC探究」で英語による 論理的・批判的思考力の向上を図る

総合学習と並ぶもう一つの柱は、英語による論理的・批判的思考力の養成だ。12年度に週1時間の「LC (Logical Communication) 探究」を学校設定科目として設置し、論理的・批判的に英文を読む力や、自分の考えを論理的に積み上げ、英文で書く力を育成する。

授業は、グループワークやディベート、プレゼンテーションなどを中心に進める。テーマは「制服はあった方がよいか」「夏休みの宿題は必要か」といった生徒に身近な話題から、「日本サッカーを強くするためには何が必要か」「TPP加盟の是非について」といった社会的問題までさまざま。英語科担当の三藤加代子先生はテーマの狙いについて次のように述べる。

「テーマは、生徒が考えやすく、理由を述べやすい内容を選び、最後は必ず自分の意見を書かせます。『表現トレーニング』と同じテーマを取り上げ、英語で討論することもあります。一度、総合学習で取り組んでいるので、より考えを深める意味でも有効です」  
教材の大半は教師の自作だ。サッカーがテーマの時は、新書を教師が英訳してディベートのテキストにした。TPPの議論の際は、統計データなどの資料を用意。生徒にTPPについての英文を速読させた後、教師が英語で解説した。

「授業前に英語科で勉強会を開いたり、社会科の先生に質問したりして、私たち自身がTPPについての理解を深めるところから始めました。議論の際は、結論を導くことよりも、それぞれの意見や理由が論理的であるかどうかというところに着目します。結論が出なくても、論理的に資料を探究し意見が言えているかどうか重要なのです」(三藤先生)

## 他教科とのコラボ授業で 社会への視野を広げる

「LC探究」では、社会の事象に対する生徒の視野を広げるために、他教科との「コラボ授業」も行っている。12年度の1年生では、家庭科、物理とで行った。家庭科とのコラボ授業は、消費問題やごみ問題をテーマとした。まず、家庭科の授業(1・5時間)で日本語でグループワークをさせ、生徒にテーマへの意見や考えを深めさせた上で、「LC探究」の授業(2時間)では、同じテーマを英語でディスカッションさせた。家庭科の浅井千雅先生は、授業で工夫したことを次のように話す。

「家庭科の授業では、テーマに対する理解を深めると共に、10年後の自分ならどうか、子どもを持つ母親なら、大学の研究者ならというように、生徒にさまざまな立場を与えて議論させました。同じテーマでも、立場によ

ってさまざまな捉え方があることに、生徒は気付いたのではないかと思います」

物理とのコラボ授業では、原子力発電の是非を考えさせた。1年生では物理を履修しないため、多井先生が総合学習で放射線や原発の仕組みなどについての講義と実験を行い、それを受けて「LC探究」で原子力発電や原発事故についての意見を英語で発表させた。

## 指導力向上には教師自身の 論理的・批判的思考力の向上が必要

総合学習や学校設定科目だけではなく、各教科の授業や定期考査のあり方も変わりつつある。定期考査では、全教科で、論理的・批判的思考力を問う問題を1問入れることとしている。授業でも、言語能力を高める活動を取り入れる教科が増えている。例えば、「英語I」では、ペアワークで必ず「あなたはこう思いますか」というオープン・クエスチョンを入れて、相手にその理由を答えさせるようにしている。「私はこう思います。なぜなら……」というように、筋道立った話し方をさせることで、論理的・批判的思考力を高めるのが狙いだ。

「総合学習だけで論理的・批判的思考力を身に付けさせようとすると、大学入試には関係ないからと言って力を入れない生徒が出てきます。教科学習の中で論理的・批判的思考

力を問う課題を出すことで、それが入試を突破するためにも必要な力であることを、生徒に気付かせたいと思います。教師自身も、生徒に学力を付けさせるためには、思考力を高める活動を取り入れることが重要であると実感するのではないのでしょうか」（表校長）

年2回、互見授業を実施し、各教科の言語活動のノウハウを学校全体で共有している。その時期には、全教師が授業を公開し、少なくとも担当教科と他教科の各1教科を参観する。公開する教師が、今回の授業での工夫点を「授業の見どころ」として公表し、参観者は該当部分についての意見や感想をフィードバックする。

生徒の論理的・批判的思考力を高めるには、教師自身も思考力を高めなければならない。それは、表校長が常に教師に求めていることだ。

「生徒への授業アンケートや模試の結果データなどの分析では、一面的な見方ではなく、もっと別の見方が出来るのではないかと、別の要素を合わせてクロス集計することで違う側面も見えてくるのではないかとといったことを、日々の業務の中でも常に問い掛けるようにしています」（表校長）

日常会話でも、「論理が飛躍し過ぎではないか」「その話の根拠は何か」など、より深い理由や論拠が問われる。教師自身が情報を論理的・批判的に整理する力が常に求められており、それが教師を大きく成長させているのである。

## 個別学力試験で得点を伸ばし 志望実現を果たす生徒が続出

改革の成果は徐々に表れ始めている。13年度大学入試では、センター試験の結果が例年より大幅に落ち込んだが、生徒は個別学力試験で大きく盛り返した。最終的には国公立大合格者数が155人で、うち金沢大合格者数が49人を記録。過去10年で最高の実績を上げた。

「論理的に問題文を読み込む力がないと、個別学力試験の問題に解答できません。順序立てて思考を積み重ねていく訓練を徹底したことが、大学入試の結果にもつながっているのではないのでしょうか」（表校長）

生徒へのアンケート結果では、「論理的思考力が付いた」「社会的な問題に関心を持つようになった」などの項目で肯定的な回答が多い。また、授業中の話し合いでも「このグラフより、このような傾向が読み取れたから」などと、根拠を踏まえて結論を述べる生徒が多くなった。

今後の課題は、日々の言語活動が確実に学力の向上につながっているということを生徒に実感させることだと、多井先生は話す。

「総合学習や『LC探究』の活動が自分の学力を高めていることを、生徒が実感しきれないように思います。自分の成長が客観的に分かる評価法を確立して、生徒の意欲を更に高めていきたいと考えています」

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 教師のチャレンジが 生徒の可能性を広げる

1学年担任 浅井千雅

私は家庭科でしか出来ないような、社会問題や生活の知恵について生徒に考えさせる授業を目指してきました。3年程前からは授業に言語活動を取り入れ、私なりに工夫を重ねてきました。しかし、グループワークや発表に生徒は生き生きと取り組むのですが、どうしても「楽しかった」「面白かった」といった感想レベルで終わっていました。その原因を突き詰めていくうちに、自分は思考を深める活動が何かを考えていないことに気付きました。そんな折、表校長が赴任され、学校を挙げて思考力育成のための言語活動が始まりました。その中で、活動ではルールづくりが大切なこと、「感想」ではなく「考えたこと」をまとめさせるなど、さまざまなことを学びました。生徒も今は活動に慣れ、更に深い議論が出来るようになってきたと思います。

私はこれまで、校内の取り組みだけではなく、校外の方とのワークショップや講演会の聴講など、自分を高めるための場を数多く与えてもらいました。そうした機会を積極的に利用し、私自身が失敗を恐れずチャレンジすることで、生徒の可能性も広がっていくのではないかと考えています。また、その中で得た失敗経験を整理して、授業改善や指導スキルの向上につなげていくことも大切です。生徒に考えさせるだけではなく、私自身が思考力を向上させて、生徒のため、学校のために何が出来るかを考えながら、精一杯取り組んでいきたいと考えています。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2006年2月号指導変革の軌跡「青森県立三本木高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



神奈川県・私立  
**三浦学苑高校**

学校改革

# 教師の意識改革を図り 生徒・進路・教科指導の 総合的な改革を推進

◎2009年度の創立80周年を機に、校名を三浦高校から現校名に変更し、校舎や制服のリニューアルを行う。13年度には普通科に「特進コース」を新設し、進学指導の強化を図る。校訓は「初心忘るべからず」。部活動が盛んで、サッカー部や卓球部、女子柔道部、ソフトテニス部などが全国レベルで活躍。

<b>設立</b>	1929(昭和4)年
<b>形態</b>	全日制／普通科・機械科・電気科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約500人
<b>13年度入試合格実績(現役のみ)</b>	私立大は青山学院大、学習院大、中央大、法政大、成蹊大、國學院大、芝浦工業大、日本大、駒澤大、神奈川大など延べ226人が合格。他に短大21人、専門学校139人、就職82人。
<b>住所</b>	〒238-0031 神奈川県横須賀市衣笠栄町3-80
<b>電話</b>	046-852-0284
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.miura.ed.jp/">http://www.miura.ed.jp/</a>

変革のステップ

<p><b>背景</b></p> <p>◎各指導が教員個々の裁量に任せられ、指導基準もなかったため、進路実績にばらつきが生じ、進路未決定者も多かった</p> <p>STEP 1</p>	<p><b>実践</b></p> <p>◎生徒指導の統一化を皮切りに、進路・教科指導面でも学校全体での取り組みを開始</p> <p>STEP 2</p>	<p><b>成果</b></p> <p>◎教師間の意識統一がなされ、指導の足並みがそろそろ。フリーターや進路未決定者の人数が激減</p> <p>STEP 3</p>
--	--	--

指導方針の不統一が  
生徒の進路にも影響

神奈川県三浦半島に位置する三浦学苑高校が、改革に着手したのは2001年のことだ。03年度の学習指導要領の改訂を控え、「新カリキュラム検討委員会」を発足させたことがきっかけだった。同校は、生徒指導においては横須賀市内でも定評があったが、その実情は、教師一人ひとりに指導が任されているというものだった。宮野くに子教頭は、当時を次のように振り返る。

「あの頃の教師たちは、言わば職人集団でした。それぞれが個人の力量で、生徒を指導していたのです。しかし、それは裏を返せば、学校としての指導方針がなかったということ。校則はあっても、教師個々の裁量による指導を行っていたのです。指導に関する評判が良かったのは、力のある教師が何人かいたからです。生徒の容儀や生活態度に乱れがあっても、波風を立てぬよう、強くは注意しない教師もいました」

生徒指導だけでなく、進路指導や教科指導でも、教師個々に任せられる部分が大きかった。三者面談の有無や模試の実施状況、指定校推薦入試の校内基準といった重要事項も、全校で統一した方針はなかった。

このことは、生徒の進路にも影響を与えてい

た。進学や就職の実績は、年度だけでなくクラスによってもまちまちで、進路が決まらずに卒業する生徒も多かった。例えば、04年度の卒業生498人のうち、進学浪人、就職浪人、フリーター、進路未決定者、その他の合計人数は97人。つまり、卒業生の5分の1は、社会との接点を持たないまま卒業していった。学習進路指導部部長の野櫻慎二先生は、その状況に危機感を抱いていた。

「進学浪人ならともかく、将来の目標さえ決まっていない生徒が72人もいるのは、社会とどう関わっていくのかを、学校側が生徒に考えさせることが出来ていなかったからでしょう。高校としての指導の義務を果たしていないと言われても仕方のない状況でした。ま



三浦学苑高校教頭  
**宮野 くに子** みやの くにこ  
教職歴、同校赴任歴共に34年。「一人ひとりの生徒に真正面から向き合う。生徒や保護者の一点の良さを褒められる教師でありたい」



三浦学苑高校  
**野櫻 慎二** のざくら しんじ  
教職歴、同校赴任歴共に17年。学習進路指導部部長。企画調整室室長。「日々努力」を目標に、生徒に努力の大切さを説き、自分も挑戦を心掛ける」



三浦学苑高校  
**中村 洋士** なかむら ひろし  
教職歴、同校赴任歴共に14年。情報管理部部长。「生徒一人ひとりと向き合い、その可能性を最大限に引き出すような教育をしていきたい」

た、私は当時、部活動の試合などを通して中学校の先生方と話すことがよくありましたが、本校について「部活動は頑張っているけれども、学習面や進路面で弱い」と言われていたこともあり、進路指導の改善が急務だと考えるようになりました」

## アンケートの声で自校を客観視し、 まずは生徒指導の基準を統一化

03年度の学習指導要領改訂はカリキュラムが大きく変わるため、学校改革を進める好機だった。しかし、新カリキュラム検討委員会が「面倒見のいい教育」をスローガンとし、職員会議で施策を提案しても、教師の課題意識が希薄なために、賛同がなかなか得られず実現には至らなかった。そこで、委員会は、同校の課題や置かれている環境を客観的に示そうと、在校生、教師、理事会、卒業生、保護者、地区内の中学校を対象に、同校の生徒の印象に関するアンケートを実施した。そこで浮かび上がったのは、「基礎学力不足」「学習意欲が見られない」「生活態度の基本が出来ていない」といった厳しい声だった。

アンケートによる客観的な意見は、教師たちに衝撃を与えた。以前から危機意識を持っていた宮野教頭や野櫻先生らは、アンケート結果を基に改革の必要性を訴え続けた。

「アンケートの結果を示して、『授業を成立させるためにも、まずは体系的な生徒指導が必要』と働き掛けました。順を追ってじっくり話すことで、改革の必要性を理解してくれる先生が増えていきました」（野櫻先生）

まずは生徒指導の統一化を図られることとなった。遅刻の定義、頭髪や服装の注意点などの基準を定め、指導の足並みをそろえたのだ。同時に、指定校推薦入試の校内基準の統一化も図った。遅刻数や欠席日数、生活態度などの推薦基準が明確になれば、担任は生徒に具体的に指導しやすくなる。そうして、生徒指導を徹底した結果、05年頃から服装の乱れや遅刻などは激減した。

## 偏差値だけでなく、学習状況など 生徒を多面的に捉え、響く指導を行う

生徒指導が軌道に乗ってきた06年度には、進路指導と教科指導の強化に乗り出した。

進路指導強化のための施策の1つめは、模試の統一化だ。以前から模試は実施されていたものの、学年団や教師個々が独自に実施の判断を行い、実施の時期も内容もまちまちだったため、経年データなどは蓄積されてこなかった。そこで、野櫻先生は、最初は自分が担任するクラスで、ベネッセの『基礎力診断テスト』（\*1）を実施し、そこから学年、全校へと実施を広め

\*1 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つで、幅広い学力層に対応する出題内容となっている。学力を測るだけでなく、テストの実施を契機に進路を考えさせたり、学習習慣の定着状況について把握したりすることも可能。

ていこうと考えた。

「模試の偏差値や全国順位を切り口にして生徒に働き掛けても、それに響く生徒はあまりいませんでした。模試の結果を教科指導にどう結び付ければよいのかを考えめぐねていた時に出合ったのが、『基礎力診断テスト』です。偏差値だけでなく、生徒一人ひとりの学習習慣や進路意識も把握できるので、生徒の内面と学力面の両方を踏まえた声掛けができ、それによって生徒のモチベーションを高められるかもしれないと期待したのです。実際、学習時間が減った生徒に『部活動が大変なのか』と声を掛けたり、希望進路を変更した生徒に理由を尋ねたりと、話題の切り口が広がり、生徒との会話が増えました」（野櫻先生）

模試に学力把握だけでない活用法を見いだした野櫻先生は、まずは他クラスに『基礎力診断テスト』の実施を提案。その良さを実感してもらって賛同者を増やし、次に学年、そして学校全体と実施を広めていった。

## 大学、専門学校が一堂に会する ガイダンスで生徒の視野を広げる

進路指導強化策の2つめとして挙げられるのが、生徒全員が参加する2つの進路ガイダンス、「進路を考える日」（3月）と「進路相談会」（4



写真 進路ガイダンス「進路相談会」（4月）の様子。生徒は体育館に用意されたブースで学校の様子を尋ねたり、受験の相談をしたりする。これにより、進学フェアやオープンキャンパスに参加しづらい部活生も、いろいろな学校に一度に質問ができ、好評だ。

月）だ。「進路を考える日」には、大学、専門学校の教職員が来校し、模擬授業を実施する。「進路相談会」では、体育館に学校ごとのブースを設けて、生徒の進路相談を受ける（写真）。希望の模擬授業を受けた翌月に相談が出来るようにして、進路への意識を高めることを狙った。

「校内で実施することで、外部の進学フェアになかなか出掛けられない生徒でも参加できるようにしました。実施初年度の協力校は専門学校が5校ほどと小規模なものでしたが、13年3月に実施した際には、大学が約30校、専門学校は約20校に協力いただきました。本校の教師たちは、真剣に模擬授業を受ける生徒の姿に感銘を受け、進路指導への意欲を

高めています」（宮野教頭）

## 授業中に学び直しを行い 学力の底上げを図る

教科指導改革の1つは、授業中に行う学び直しだ。基礎学力の底上げを図ろうと、授業で小・中学校段階の学習内容の復習をする時間を確保している。きっかけは、機械科と電気科の1年生で、工業専門科目の授業に学び直しを取り入れたことだった。情報管理部部長の中村洋士先生は次のように話す。

「機械科や電気科には、小学校段階の計算問題に苦勞する生徒が少なくありません。しかし、専門科目を学ぶ上で計算は避けて通れず、つまづいているところを放っておいては学びが先に進みません。プリントなどの家庭学習に頼っているのは生徒の取り組みにばらつきが出ると考え、授業で小・中学校段階の計算練習に取り組みさせるようにしたのです」

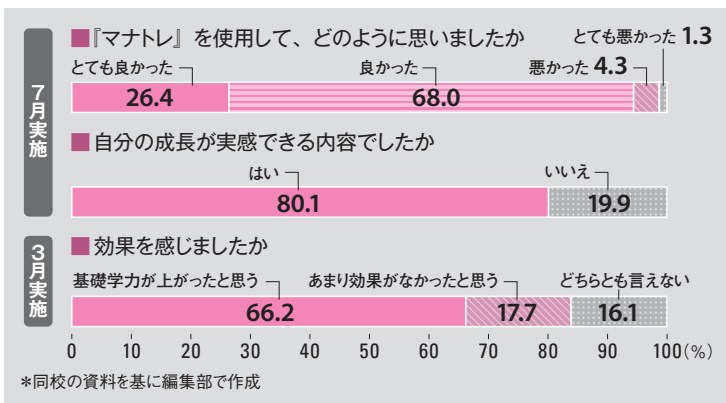
12年度には、1年生全員に国語、数学、英語の授業で中学校段階までの復習を行った（\*2）。高校の学習進度に遅れが出ないように、この3教科については1単位ずつ増やして対応。高校入学直後の意識の高い時期に集中的に取り組みさせたことで、学力の底上げは確実に進み、GTZ（\*3）でDゾーンの生徒は大幅に減った。更に、生徒のアンケートでは、約66%が「基

\*2 具体的には、入学時から5月の中間考査まで、ベネッセの「マナトレ」（ベネッセの「進路マップ」の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材）に取り組みさせた。

\*3 生徒の学力到達度を<S>~<D>のゾーンで示す、ベネッセの学力指標。Dゾーンは、「基礎・基本養成レベル」を指す。

図

### 学び直しに関するアンケート結果 (抜粋)



「マナトレ」を使った学習に関して、生徒の8割以上が「自分の成長が実感できた」「学び直しをして良かった」と回答している。今後は進研模試やスタディーサポートの結果からも、学び直しの成果を検証していく予定。

「基礎学力が上がったと思う」と答えた(図)。

## 生徒も教師も意識が変化し 進路決定率が9割以上に

さまざまな改革は、教師の意識を変えていった。職人集団と言われていた教師たちが、指導力向上に向けて、08年度に教科ごとの授業研究を始めた。更に、学校外の教員研修に積極的に参加する教師が増えているという。

生徒の進路意識も変化した。進学や就職など

## 若手教師が語る、指導変革への情熱

### 思いを形にするには まず「自分が変わる」が大切

学習進路指導部部长 野櫻慎二

改革当初、新カリキュラム検討委員会の一員として、さまざまな提案を行いましたが、先生方の意識を変えることは予想以上に厳しいものがありました。より良い学校づくりを目指そうとしても、それに懐疑的な先生もいました。そうした教師間の停滞した雰囲気を感じ取るからか、「どうせ自分は何をやっても駄目だから」と自分を卑下する生徒が多いことも気になっていました。どうすれば学校が良くなるのか。解決のヒントを求めて書店へ出掛け、ジャンルを問わず本を読みあさる日々が続きました。

そんな時、ある本に「自分が変われば相手も変わる」という一節を見付けました。私は、自分の考えを一方向的に伝えるだけで、意見が合わないと相手に攻撃的な態度を取ることに変化を求めていたのです。「悪かったのは自分だ」と気付くと、気持ちが楽になりました。そして、「どのような言葉で説明すれば相手を説得できるのか」と前向きに考えられるようになったのです。自分が考えていることをきちんと筋道立てて説明したら、理解を示してくれる先生方が現れ、改革が軌道に乗り始めました。

改革によって学校の体制が変わり、教師間に「新しい取り組みを積極的に行っていこう」という空気が流れるようになると、生徒たちの間にも変化が起きました。部活動や生徒会、ボランティア活動に進んで参加する生徒が増えていったのです。そうした生徒たちの姿を見るのはとてもうれしく、今後も自分に出来る形で生徒の成長を支援していきたいと思います。

の目的意識を持って学習や資格取得に努力する生徒が目立つようになり、進路未決定者は減少。11年度の進路決定率は95%まで上がった。「一人ひとりを伸ばす教育」というスローガンの下、新たな改革に乗り出している。13年度、普通科に「特進コース」を新設。更に、文理コースを「進学コース」に、普通コースを「総合コース」として、希望進路に応じた指導を強化していく。

特進コースにはこの春、12人が入学した。目標は国公立大や難関私立大の現役合格だが、それだけにとどまらず、地域に住む外国人との交

流、企業訪問などを通して、広い視野を育み、国際的に活躍できる人材の育成を目指す。

「本校での3年間、そして大学進学後の4年間を通して、生徒が社会人基礎力を身に付けられるような教育活動に取り組んでいきたいと考えています。そして、それらの取り組みを、いずれば本校のスタンダードとなるよう広げていくことが大きな目標です。どのコースに入学しても、本校の教育を受けることで学力的にも人間的にも成長し、40歳になってもグローバル、あるいはグローバルに活躍できるような人材を育てていきたいと思っています。」(野櫻先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2012年4月号指導変革の軌跡「宮城県黒川高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)

# 「もっと響く指導」に するために！ 生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を伝えてきた「生きたデータの徹底活用」。さらに響く指導を実現するために、現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

## テーマ 3年生 夏休み前の意識付け



「生きたデータ」2011年6月号を参考に、  
進路志望検討会に臨んだところ……

進路志望検討会の目的と日々の指導のつながりを整理するシート（抜粋）



**学年目標** 一つ上、一つ先の目標を生徒が最後まで貫けるようにする

**7月進路志望検討会の狙い** 夏休みに一人ひとりの生徒が取り組むべきことを学年団で明らかにし、各担任経由で生徒と共有できるようにする

④全体で検討する項目

### 1 志望校設定の成熟度を把握する

生徒の将来の目標に合致した志望校を設定できているか確認し、その志望校がしっかり考え抜かれた末の選択になっているか、生徒との面談や学力動向を基に分析する

⑤担任がチェックする項目

資料	入試科目一覧、生徒記入の志望調査票 など	相談先
<input checked="" type="checkbox"/>	生徒の将来の志望と希望進路が一致しているか。よりふさわしい進路を見逃していないか	進路指導部
<input checked="" type="checkbox"/>	学部の志望順位や難易度の順位は適正か（例えば第1志望が工学部なのに、第2志望が医学部になっていないかなど）	進路指導部
<input checked="" type="checkbox"/>	志望校の入試科目と生徒の履修歴にミスマッチはないか	進路指導部
<input checked="" type="checkbox"/>	<b>最終チェック</b> 志望校は生徒が考え抜いた大学になっているか	

### 私の狙い

生徒の志望や夏休みの勉強法について、進路志望検討会で他の先生方からアドバイスを得たかった

### 取り組み内容

検討会の2週間前の6月末、生徒に志望や勉強方針を確認して、検討会に臨んだ

### 感じた課題

そもそも自分が把握した志望は生徒の本音だったのか、また先生方にアドバイスいただくポイントを十分に絞りきれなかったのか、疑問が残った

「もっと響く指導」のポイント

①

担任が主軸になりながら  
学年団で多面的に生徒を捉える



前任校で初めて3年生を担当したのですが、生徒把握の面で自分の力不足を感じました。2011年6月号で紹介されたシート（上図）を参考に、生徒の志望や学習状況を確認して進路志望検討会に臨んだのですが、「担任が説明した現状認識を承認する」という形式的な流れになってしまい、自分の指導に不安が残ったままでした。



本校の進路志望検討会では、関係する教師全員が対等の立場で参加しますが、効率的に検討を行うためには、担任が個々の生徒の課題を出来るだけ明確にしておくことが重要です。「この生徒は入学時から志望が変わっている」「〇〇大の2次試験に対応する力を

付けられるか」など、担任が気になることを事前に洗い出しておきたいですね。



そういう意味では、事前の準備が十分ではなかった気がします。「6月の時点での生徒の志望、学力はこうである」という現状認識だけでなく、もっと大きな視点で「この生徒はこんな志望だったはず」「これは生徒の未来のために適切な志望変更か」と、可能性を前向きに語ってみるべきでした。



7月の進路志望検討会の狙いは、志望校を設定し、第1志望合格に向けた生徒の学習方策と、学校全体としての指導戦略を明確にすることです。生徒がやる気を出している時期だからこそ、担任として強気の後押しも大切です。

若手先生代表

関東地方の公立高校に勤務。13年度、2年度目の3学年担任。



T先生(30代)

ベテラン先生代表

中国地方の公立高校に勤務。各学年の主任経験豊富。



N先生(40代)

\*このコーナーは、高校の先生方（今回は関東地方と中国地方）との検討会の内容を基に構成しています。



前任校では、進路志望検討会は担任の報告の承認の場であり、他の先生方からアドバイスをいただくことは少なかったんです。同期で他校に勤務する教師の中には、進路志望検討会を経験したことがない者もいます。あるべき姿が分かりません。



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

●生徒の夢をかなえるための検討会のチェックポイント

- ・努力や頑張りを通して本人の成長を促せる志望設定であり、大学受験であるようにする
- ・どこまで伸びるのかの見極めと、目標学力に到達させるための方策を考える場とする
- ・志望の変化を比較検討し、変化の有無にかかわらず、生徒が目指すべき進学先であるようにする

生徒の可能性を高めるための志望検討シート



名前		志望先	志望に関する担任の理解	志望実現のための指導ポイント
A	4月			
	7月			
B	4月			
	7月			

担任が分析しておくポイントの例

- ・生徒が自分の知っている限りで、志望先を狭く考えていないか
- ・現在の学力レベルで志望を低く考えていないか
- ・専攻したい分野と、教科学力のレベルがかけ離れていないか

「もっと響く指導」のために改訂すると...

データを生かす指導の流れ

志望先が本人にとって適切か、志望先に合った指導ポイントを担任自身が把握できているかを、複数の教師でチェックし、生徒に還元する。

- 1 学級担任が、一人ひとりの生徒について志望を一覧にする。4月以降に志望の変化があった生徒は、その理由が適切か、背景と担任所見を記入。
- 2 記入したシートを、会議前に配付。各生徒の情報を出し合い、志望の妥当性や学力の定着度、伸びの見込みなどを踏まえて、夏休みの指導方針を確認する。
- 3 夏休み前の面談などで個々の生徒に学習の進め方の指導や志望の確認を行う。



確かに、上図のように「担任の理解」と「志望実現のための指導ポイント」をまず書き出しておくことで、担任としてのかかわり方は大きく違ってきますね。



かつて私は先輩の先生から、「進路志望検討会での1人の教師の発言で、生徒のその後の人生が大きく変わることがある」と教えられました。誰が生徒の人生を変えることになるか分からないからこそ、進路志望検討会では参加する教師全員が当

事者意識を持ち、集団の力で生徒を理解していくことが求められます。私は若手の先生には「先生の後押しが生徒の可能性を大きく高めるだけでなく、ベテランの先生から指導の根拠を学べる場でもありませんから、指導力の伝承の場だという気概を持って参加してください」とお願いしています。T先生にも、自校のベテランの先生方のサポートを受けながら、生徒の志望の納得度と合格力、そして自分の担任力を高めるつもりで意見をぶつけてほしいと思います。

夏休み前から学習内容計画シートを使ったのですが、計画通りに進んだかどうかばかりに生徒の関心が向いてしまいました。計画倒れに終わった生徒は、後悔の念を抱えて夏休みを終えてしまいました。



「生きたデータ」2011年6月号を参考に、生徒に学習計画を立てさせたところ……

「もっと響く指導」のポイント

②

**進研模試結果を活用した弱点克服のための学習内容計画シート**

自分の弱点	克服のための計画	月/日	午前		午後		1日の学習の目標		達成状況 (○△×)
			9	10	11	12	1	2	
② 巻頭の中でも 三角関数と 数列が分から ない	③ 数学の教科書 の中から 三角関数と 数列の基礎問 題を全て解く	④	9	10	11	12	数学	教科書 P0~P10	
			9	10	11	12	英語	問題集 P0~P10	
			9	10	11	12	数学	教科書 P0~P10	
			9	10	11	12	国語	漢字問題集 P0	
	2週目		9	10	11	12			

① 参考 進研模試帳票の裏面

数1 2 1次必須 難点/得意 得意/得意 得意/得意

1方程式と不等式 25/40

2図形と計量 場合 32/40

3平面図形 12/30

4三角関数 指数 12/30

5数列 極限 12/30

3ベクトル 6/30

4数列 6/30

●…あなたの得点率  
□…目標得点率 ○…得意分野  
▼…対策が必要な分野

達成状況には、学習時間が達成できたかではなく、目標に掲げている学習内容がきちんと理解できているかで○△×を記入する

**私の狙い**

受験本番に向けて、生徒に孤独に耐え、1人で学ぶ力を付けさせたいと考えた

**取り組み内容**

計画シートを生徒に記入させ、夏休み前から、学習計画を立てて実行、達成状況を振り返らせた

**感じた課題**

失敗する経験も想定しておきながら、計画が破綻した生徒が落胆し、自己肯定感を低下させていった。その回復までに時間が掛かってしまった

# 秋以降に必要な自学自習力を身に付けさせながら、自分の学習状況を振り返らせながら、

進路志望検討会を経て夏休みに入ると、生徒は夏の自学自習に取り組みます。私は、夏の間1人で学ぶ力を付けさせたいと思い、2011年6月号で紹介されていたような学習計画シート(上図)を用いた指導を7月上旬に行いました。しかし、もともと計画性のあった生徒はある程度うまくいくものの、多くの生徒は計画倒れに終わり、2学期になってから面談などで一人ひとりの学習計画をチェックすることが必要でした。

自学自習力が本当に必要になるのは、夏休みよりも、2次試験対策が始まる秋以降です。むしろ夏休みは「失敗するかもしれない」という気持ちで、学習の量と質の両面から計画を見直

し、修正する習慣を付けさせたい時期です。その意味では、一見順調に計画をこなした生徒もこなすことに満足し、質が担保されていなかったかもしれません。

計画をこなすことが出来たかどうか重要ではなく、計画が目的に対して妥当であり、弱点を克服し、力を付けるための自分なりの学習スタイルになっているかどうか重要ですね。

夏休みだから1人で勉強しなさいといきなり手放すのではなく、夏休みを掛けて働き掛け、1人で学ぶ力を付けさせるという意識の方がよいと思います。そうであれば、長い夏休み、担任として学習の進捗をチェックする機会も必要になります。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます!

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご利用ください!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→

生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

2007年4月号「受験生にするための3年生1学期の意識付け」

2008年6月号「受験へ向けた3年生保護者への意識付け」

2010年4月号「3年生1学期の「受験生への切り替え」と自立の一步となる志望校設定」など



「もっと響く指導」のポイントと  
「生きたデータ」改訂案

### ●秋以降、孤独に耐え、ねばり強く受験勉強に向かうための基盤を7月上旬につくる

- ・出来なかったのには原因がある。課題を修正して、克服する自律力を高める
- ・3年の夏だからといってあれもこれもでは破綻する。優先順位をつけて学習する勇気を持たせる
- ・生徒の独りよがりにならないよう、担任がチェックし、成長を褒める材料を得る

進捗を確認しながら弱点克服に取り組む学習計画シート



自分の弱点	弱点克服のための計画	月/日	学習内容	1日の学習時間	集中できた時間	1日の振り返り (弱点克服につながっているか)
		/	予定 ----- 修正した予定			<p>記入の際のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1日の中で複数の教科を配分したり、1つの教科の中でも分野を調整したりすることを意識させる</li> <li>・振り返りは1日単位だけではなく、1週間単位など少し長めのスパンでさせてもよい</li> </ul>
		/	予定 ----- 修正した予定			
		/	予定 ----- 修正した予定			
		/	予定 ----- 修正した予定			
		/	予定 ----- 修正した予定			
		/	予定 ----- 修正した予定			

「もっと響く指導」のために  
改訂すると...

データを  
生かす  
指導の流れ

秋以降に1人で学習できるようになるために、夏休みはその試行期間と位置付け、学習計画の見直しを肯定的に捉える。

**1** 夏休み中に、効果的に学習計画立案、実行が出来るように、夏休み前に、上記のデータを用いて、計画立案と実行をさせる。

**2** 弱点克服という最優先テーマを常に意識させ、時間の使い方や教科バランスについて具体的にチェックし、修正させる。

**3** 夏休み中もこのサイクルを続け、登校日や課外補習の日などに学習状況を担任と確認し、計画を随時修正させる。



夏休みの学習の過程でも、生徒に学習量や質の検証と、計画の修正を行わせるわけですね。



秋以降、限りある時間の中で、必要な内容を見定め、具体的な学習計画に落としとして学習していく力を、生徒は夏休みを掛けて試行錯誤しながら身に付けると考えるとよいでしょう。計画的な学習習慣が身に付いている生徒にも、「計画がうまくいったかどうか」ではなく、その計画によって自分の弱点が狙い通りに克服できたかまで考えさせるのです。



自分の弱点から学習計画を立て、その学習によって弱点が克服できているかを確認しながら、次の計画を立てるというサイクルですね。



忘れてはいけないのは、失敗を過度に引きずる生徒は、自己肯定感が低下し、秋以降力を出し切れないおそれがあることです。そうした生徒には学習計画シートを見ながら、「計画で修正できたのはどこか」「どの教科で集中できたのか」を面談で明らかにし、出来ている部分を褒めてあげましょう。

### 複数の国の法制度を比較し 発展途上国への支援策を提案

名古屋大大学院 法学研究科 松浦好治<sup>よしはる</sup>研究室

日本は急速な近代化を迫られた明治初期に、西欧諸国の法制度を学び、民法や刑法などの法を自国に適するようにアレンジして取り入れた。外国の法制度をそのまま自国の法制度としても、自国でうまく機能するとは限らないからだ。現在、発展途上国において急務とされている法制度の整備を効果的に実行するためには、発展途上国それぞれの国の特徴を把握し、それぞれに合う形に先進国の法制度を変えて取り入れる必要があると、名古屋大大学院法学研究科の松浦好治教授は語る。

#### フローチャートで分かる松浦好治研究室

##### 大学院生の 主な出身分野

法学

政治学

など

◎松浦先生がコーディネーターを務める名古屋大博士課程教育リーディングプログラムは、国境を越えて法を移植できる専門家の養成を目指す英語のプログラムであるため、法に関係が深い学部の出身者が目立つ。また、意図的に学生層が多国籍になるようにしており、2013年度は日本人2人に加え、ウズベキスタン、フランス、ポーランドから各1人計3人を新たにプログラムに受け入れた。

##### 研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎研究対象である国の法体系を理解するためには、法の条文だけでなく、法を制定した理由、法の解釈の仕方など、法に関するあらゆる情報を分析する必要がある。法は社会と密接に結び付いているため、関連する情報は、政治、経済、文化、歴史、風俗など多様な分野に存在し、それら全てが研究対象となる。

##### 研究成果と 社会のかかわり

法情報の共有化

法令英訳支援

条例作成支援

など

◎松浦先生が関係する法情報研究センターでは、日本の法情報の英訳支援や漢字文化圏の法情報の共有、スーパーコンピューターを使った地方自治体の条例の共有・作成支援などの活動を行っている。

## 社会を見つめる目と行動を起こそうとする意志が大切

比較法学が求める学生像

何が課題かを把握するための情報収集・分析力

考え方や価値観の異なる人とかかわる力

知らないことを探究しようとする知的好奇心

法はより良い世の中をつくるためのツールですから、これを学ぼうとする人には、現在の社会にどのような課題があるのかを把握できるようになってほしいと思います。ここで鍵を握るのは、情報を収集し分析する力です。集めた情報が多いほど比較する対象も増えるため、正確な分析ができ、課題への対策も立てやすくなるからです。膨大な情報を上手に処理する能力も磨かなければなりません。

課題解決策は考えるだけでは駄目で、それを実行してこそ、状況を変えることが出来ます。そのため、たとえ反対されても粘り強く交渉し、相手を納得させる必要があります。解決策を実行に移す場合には、多くの人と力を合わせることを求められるので、考え方の異なる人とも円滑に意思を疎通する力が大きな武器になるでしょう。この力を身に付けていれば人脈が広がり、多方面の情報を集めることにもつながるはずです。また、法以外の知識も、積極的に吸収してほしいと思います。好奇心を大切に、知らないことにどんどん挑戦してください。

### 高校生へのメッセージ

法をつくるのも人、使うのも人、求めるのも人。このように、常に人を相手にする学問なので、他者から学ぼうとする姿勢が大切です。不愉快なことを言われたら、言った相手を批判したくなるかもしれませんが、しかし、批判する前にもう一度、「相手がなぜそんなことを言ったのか」を考えながら、相手の話に真摯に耳を傾けてみてください。きっと自分の視野を広げられると思います。



松浦好治 特任教授

まつうら・よしはる 名古屋大学院法学研究科特任教授。名古屋大博士課程教育リサーチングプログラム「法制度設計・国際的法制移植専門家の養成プログラム」コーディネーター。大阪大学院法学研究科修士課程、及び Yale Law School LL.M.プログラム修了。中京大助教授、大阪大教授、名古屋大教授を経て、2013年度から現職。主な著書に『法と比喩』（弘文堂）、編著に『法情報学』（共編・有斐閣）など。

### 研究を始めたきっかけ

## 近代日本の社会制度をより深く理解したい

私は、近代に移行する激動の時代である19世紀後半に、日本や欧米諸国の社会制度がどのように変わっていったのかに関心がありました。鉄

道が敷かれればその営業や運行などについての法、選挙を行うようになればその仕組みを定めた法というように、法は社会の求めに応じて制定されます。そのことに気付いた私は、社会制度をより深く理解するために法を学んできました。

日本は明治初期に、国会を設けたり、近代的な軍隊を組織したりと、西欧諸国に倣って新制度を整えていきました。新たな法も、欧米各国の法を大いに参考にして制定されました。ただ、完成した日本の法を、参考にした外国の法と比べると、単に翻訳しているだけではないことが分かります。どの法も、日本の社会に合うようにアレンジして定められているため、日本がどのような基準で何を取捨選択したのか、ある条文がなぜ変えられたのかといったことを

把握するには、法だけでなく、文化や風俗などさまざまな分野をも西欧諸国と比較し、それぞれの国の社会の特徴を理解する必要があります。このスケールの大きさに魅力を感じ、私は法思想史や法哲学、比較法学の研究に携わりました。

### 研究概要

## 日本の法情報を英語に翻訳しデータベース化

1990年代になると、旧ソ連の崩壊に前後して、資本主義へ大幅に政策を転換する社会主義国が続出しました。そこでは、国有地の私有化、国営企業の民営化などが生じ、それに伴い、旧体制にはなかった法制度の整備が求められるようになりました。どのような法が必要なのかを学ぶために、ベトナムやモンゴル、ウズベキスタンなど、アジア各国の多くの留学生が日本の大学の門をたたきようになったのです。19世紀後半に西欧に学んで整えた日本の法制度を、20世紀末にアジア諸国が参考にし始めたということです。

欧米の法や法令集は、英語、ドイツ語、フランス語などで広く世界で

共有されています。ところが、日本の法に関する情報は、主要な外国語、特に英語にほとんど翻訳されていなかったため、日本の法制度を学ぶとする留学生は、まず日本語を習得しなければならず、大きな負担を強いられていました。

日本の法情報や法と社会に関する英語情報を幅広く、継続的に蓄積して提供することの重要性は、以前から認識されてきました。熱心に活動している専門家も少なくありません。私は、日本の法に関する情報（法令や条例は、議会議事録その他）を整理し、良いものを選んで外国語で提供するための基礎研究をしています。これに関連して、日本の国会の議事録などが英語で記載された「英文官報」の収集など、法情報を英訳するための参考資料の整備にも当たっています。

日本法を英訳して広く世界に提供しようという計画は、既に一部が実用化されています。例えば、法務省がインターネット上に無料で公開している「日本法令外国語訳データベースシステム」では、日本の法に使われている言葉を日本語と英語の双

方で検索でき、その言葉を含む条文も、日英2か国語で読むことが出来ます。日本語の法概念が英語の何に当たるかを容易に把握できるわけです。

対訳の形でデジタル化された法情報を利用すると、日本語ではどの法でも同じ言葉で表現される法概念が、英語では法によって別の言葉で表現されるといった、日本語と英語の法概念の違いを網羅的に比較することも可能です。そうすると、英訳を使った複数の国の法情報を比較することも容易になるので、よく似た複数の外国の法制度を比較し、自国の法制度の改善に活用することも出来るようになります。

### 研究の展望

## 法情報の共有を通じた東アジア諸国の相互理解

私たちの研究チームは、いわゆる漢字文化圏内の法概念の比較にも力を入れるようになりました。まずは日本、中国、台湾、韓国を研究対象としています。例えば、「不遑及」という言葉は4か国で共通して使われていますが、日本の裁判所に当た

る機関を他の3か国では「法院」と呼んでいます。このように、研究によって、日本、中国、台湾、韓国の法がどの程度同じ漢字を使っているのか、どのような法令が似ているのかなどを知ることが出来ます。

また、日本、中国、台湾、韓国のデジタル化された法情報を各国語と英語で集める作業も続けています。これが完成し公開されれば、東アジアの法情報を共有、検索できるようなので、各国政府や関係機関は自国に必要な法知識を手軽に得られるようになるはずです。

ただ、法制度を自国でうまく機能させるためには、外国の法をそのまま移植するのではなく、明治期の日本がそうしたように、自国に適する形に変えなければなりません。どの法をどのように整備すべきかをアドバイス出来る人材を日本から送り出すことは、発展途上国への大きな支援になると思います。今後も、比較法学によって深めた専門知識と、異文化を理解する広い視野を併せ持ち、発展途上国の法整備支援に貢献できる人材を育成していきたいと考えています。

### 用語解説

① ソ連  
ソビエト社会主義共和国連邦。15の社会主義国から成る多民族国家として1922年に建国されたが、91年に解体した。国土の大部分は、現在のロシア連邦に当たる。

② 英文官報  
官報とは法律や告示などを一般に知らせるために国が発行する機関誌。英文官報とは、連合国軍総司令部（GHQ）の覚書を受け、日本が1946年から約6年間発行した、日本の官報の英訳版。52年4月にサンフランシスコ講和条約が発効され、日本が独立を回復したことをきっかけに、発行を廃止。本誌と号外などを合わせ、3220号の発行が確認されている。

③ 漢字文化圏  
漢字と漢字による言葉を共有する国や地域の総称。中国、台湾、日本、韓国、北朝鮮、ベトナムなどから成る。現在、韓国と北朝鮮ではハングルでの表記、ベトナムではアルファベットでの表記が主流だが、朝鮮語にもベトナム語にも漢字由来の言葉が多く含まれているため、漢字文化圏に属すると思われる。

④ 倒産法  
破産法、会社更生法など、倒産処理手続きに関する法の総称。

# 社会保障制度をいかに中国全土に浸透させるか



鈴木 秀さん

すずき・さかえ 名古屋大大学院法学研究科博士前期課程1年。同大博士課程教育リーディングプログラム「法制度設計・国際的制度移植専門家の養成プログラム」履修生。三重県立津西高校卒業。

**Q** **なぜこの分野に進んだのですか**

**A** 高校時代にアメリカに留学し、福祉施設などでのボランティア活動をすることをきっかけに、私は社会保障に関心を持ちました。そして、多くの人が暮らしやすい社会を実現するために法を学びたいと思うようになったのです。

法学部で学ぶうちに、法を適切に運用するためには、その法が何のためにつくられたかを把握する必要があります。立法目的

は、日本の法を読むだけでは捉えにくかったのですが、英語圏諸国の法と比較するとよく分かりました。比較法学の重要性を知り、この分野に進むことにしたのです。

**Q** **松浦先生の研究室での研究内容を教えてください**

**A** 発展途上国の法整備をいかに支援するかを、比較法学を通して研究しています。柱は2つあります。1つめは自分で設定したテーマで、中国における都市間での社会保障制度の格差、特に生活保護制度の格差を是正するために、どのような法を整備すべきかを研究しています。

中国は生活保護制度が全国に行き渡っていると発表されていますが、各自治体や都市によってその普及の程度はさまざまです。その状況を改善するために良い制度をどのように構築するかを、日本や中国の文献を読みながら考えています。いずれは現地を訪問してこの目で実態を把握したいと思っています。

2つめの柱は、グループ研究です。海外からの留学生3人を含む大学院生5人で、アジア諸国の倒産法

を比較し、倒産法に関する2か国条約の草稿の作成を目指しています。

私はタイとブルネイの倒産法の比較を担当しています。1か月に1回、互いの研究内容や課題を報告し、各国の倒産法の特徴を条約にどのように生かせばよいかを話し合います。私とは全く違う発想による意見が出されることが多く、「そういう見方もあるのか」と感心することもしばしばです。

**Q** **高校生へのメッセージをお願いします**

**A** 他者と意見を交換すること、で新たな考えが生まれますから、皆さんにも多くの人と触れ合ってもらいたいと思います。私はグループ研究での議論を終えると、一人ひと

りの意見が1つにまとまり、今までになかったアイデアになっていると実感します。時には議論が白熱し、8時間にも及ぶことがあります。長いとは感じません。他の大学院生から出される意見を聞き、自分の考えを振り返ることに集中していると、時間が経つのを忘れず。

自分と考え方や価値観の違う人たちと出会うために、皆さんも、積極的に海外へ目を向け、機会があったら、ぜひ留学してください。それまでとは異なる環境で何かに全力で取り組み結果を残せば、自信につながります。海外と日本での体験を比較することで視野が広がるため、日本での日常生活にも新たな魅力を感じられると思います。

## 私の高校時代

### 人生の岐路となったアメリカ留学

●高校2年生の時、アメリカのオハイオ州に1年間留学しました。その間、生活保護施設や選挙活動現場などでさまざまなボランティア活動に携わることが出来ました。そこで痛感したのは、問題の実態を肌で感じる大切さです。新聞やテレビの報道を通してではなく、その場で直接人と触れ合い、何が起きているかを知ることが、共感を生み、それが新しい一歩を踏み出す原動力となります。

また、留学時代に経験したディスカッション形式の授業を通して、自分の意見を持ち、それを相手に分かりやすく伝えることがいかに重要かを学びました。私のプレゼンテーションはたどたどしかったはずですが、それでも、クラスメートが拍手してくれたことは印象的でした。

苦しい時もありましたが、自分自身と常に向き合い、進路を決める充実した1年間だったと思います。

### 手を掛け、長い目で主体性を育みたい

4月号の特集で、愛知県立一宮高校の伊藤智先生（いとうちか）が言われた「主体性を育むには、まずは手を掛けることが今の生徒には必要だ」という言葉に大いに共感した。一昔前には、「生徒の自主性に任せる」と言って特別な指導や工夫をしない教師が少なからずいた。しかし、生徒に「自主的、主体的に取り組める力」を付けることは、教師の使命だと思う。生徒がそういう力を身に付けられるよう、課題を与え、負荷をかけることが必要だ。その際、成長には個人差があることを忘れてはいけない。高校生のうちに身に付けることが出来る者もいれば、そうでない者もいる。生徒一人ひとりを長い目で見ていきたい。

〔広島県広島市立沼田高校・正木勝治〕

### 数学の授業における主体性の育成を模索

数学の授業において、主体性をどう育ていくべきかに苦労している。活用重視の学習では、課題学習がその中心に位置付けられているが、いつの間にか、教科書にあるものに対応してしまっている。身近な題材を使った教材を開発する必要を痛感しているが、一方で、数学の問題は数学の問題らしくした方が、生徒は取り掛かりやすそうな様子も見られる。どのように取り組んでいけばよいのかを試行錯誤している。

〔宮城県多賀城高校／私立常盤木学園高校・高谷将宏〕

### 3年間のビジョンに基づいた効率性が大切

4月号「指導変革の軌跡」の北海道北広島

## Reader's VIEW

Volume **2**

読者のページ

### 読者の先生方からのご意見を紹介します

高校、秋田県秋田市立秋田商業高校は共に、学校経営に必要不可欠な「高い効率力」を持っていると感じた。3年間のビジョンに基づき何が必要なのかを、時に素早く、時に時間を掛けて、生徒に合わせた変化球を出す指導が確立されているようだ。金と時間を掛ければ何事も達成は容易だ。しかし、成功している学校を見ると、限られた時間の中で効果的に勝負していると感じる。また、そのためには、生徒の要求する知識をピンポイントで引き出す能力と体験が不可欠であるとも思った。

〔愛媛県・匿名希望〕

### 教師も「団体戦」でシステムの継承を

4月号「指導変革の軌跡」の北海道北広島高校のシステムとノウハウの継承は素晴らしいと感じた。システムとして構築されていないければ、せっかくの取り組みもその時だけのものになり、学校全体の活性化にはつながらない。せっかく改善しても、前の学年ではこうしていたからと元に戻ってしまうこともある。改善を教師全員が自分たちの成果として感じられるように取り組んでいきたいものだと思う。少数の教師が頑張るのではなく、教師も「団体戦」という意識が必要だ。

〔富山県立立井高校・山口康子〕

### 教師川柳

ネクタイが板に付かない参観日

埼玉県・氷川の子

## 子どもは未来

Benesse 教育研究開発センターでは、子どもたちの成長に寄り添う研究と社会への発信を通して、一人ひとりが学びに向かい、今と未来を“よく生きる”ことに貢献することを目指しています。

Benesse® 教育研究開発センター「VIEW21」編集部

### 編集後記

◎2日間の限られた「高校生未来プロジェクト」のワークショップの中で、「学びとは何か」という壮大なテーマを考えることは、不安なことでもありました。参加する高校生がどれほど納得する答えを見付けられるのだろうか。しかし、彼らは、私の予想をはるかに超えてさまざまなことを感じ、考え、自分の言葉で学びの意味と明日への意欲を堂々と語っていました。それは、彼らが「万人にとっての正解」「今すぐに全てを理解すること」を、求めていなかったからではないかと思えます。考えて語り合う、それを続けることの価値を改めて教えてもらいました。(青木)

VIEW21 6月号 Vol.2

2013年6月7日発行

発行人 岡田晴奈  
 編集人 谷山和成  
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター  
 印刷製本 凸版印刷(株)  
 編集協力 (有)ペンタコ  
 執筆協力 中丸満、二宮良太、横堀夏代  
 撮影協力 ヤマグチイッキ  
 イラスト協力 カモ  
 VIEW21編集部  
 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34  
 電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2013

VIEW21

2013  
August  
8月  
Volume 3

次号は  
8月23日発行(予定)

「VIEW21」高校版は  
年6回の発行です